

Service-Learning Studies Series No.1
サービス・ラーニング研究シリーズ1

「サービス・ラーニング入門」
“Introduction to Service-Learning”

国際基督教大学
International Christian University

サービス・ラーニング・センター
Service Learning Center

Service-Learning Studies Series No. 1
サービス・ラーニング研究シリーズ 1

「サービス・ラーニング入門」
"Introduction to Service-Learning"

目次

執筆者紹介（執筆順、敬称略）	1
はじめに	3
1. 「サービス・ラーニング」とは何か（山本和）	5
2. Educating the Heart: Service Learning and Shaping the World We Live In（Florence McCarthy） ...	11
3. グローバリゼーションの捉え方とサービス・ラーニングの意義（山本和）	20
4. コミュニティ・サービス・ラーニング -教育・大学の知・社会の変革-（西尾隆）	34
5. 日本語教育とサービス・ラーニング（佐藤豊）	46
6. The Thai Work Camp: Service to God and Humankind（Paul Johnson）	54
7. 「Volunteerism と市民社会」（村上むつ子）	57
8. Elements of a Successful Service Learning Experience（Florence McCarthy）	64

執筆者紹介 (執筆順、敬称略)

山本 和

国際基督教大学 サービス・ラーニング・センター センター長/

国際関係学科 客員教授

国際基督教大学卒、コロンビア大学大学院修了 (経済学修士)

専攻:国際金融・国際経済論

国際基督教大学において、サービス・ラーニング・プログラムの推進、充実化の中心的な役割を果たしてきている。

西尾 隆

国際基督教大学社会科学 教授

国際基督教大学卒、同大学院行政学研究科博士後期課程修了 (学術博士)

専攻:行政学、地方自治論

国際基督教大学のサービス・ラーニングでは、主に「コミュニティー・サービス」と担当、継続して三鷹市などに学生をおくりこんでいる。

佐藤 豊

国際基督教大学 語学科 教授

国際基督教大学卒、ハワイ大学大学院修了 (Ph.D.)

専攻:日本語学

サービス・ラーニングでは、日本語教授法を学んだ学生を (財) 三鷹市国際交流協会 (MISHOP) や韓国の高校に派遣し、日本語を外国人に教える奉仕活動を指導している。

Florence McCarthy

国際基督教大学 サービス・ラーニング・センター特別顧問

University of California (Berkeley) 卒、Michigan State University (Ph.D.)

専攻:社会学、人類学

国際キリスト教大学のサービス・ラーニングのプログラムに設立当初から全面的に関わり、プログラム運営の指導や実施を支援している。

Paul Johnson

国際基督教大学 (ICU) 教会牧師、ICU 大学牧師

Lewis and Clark College (Portland) 卒、Princeton Theological Seminary,

Princeton (神学修士)

専攻:神学

タイのパヤップ大学と合同でチェンマイ北部の農村地域で教会を建て、タイ・ワークキャンプ (IQ 教会と宗務部が共催) のリーダーとして、ICU のサービス・ラーニングを支えてきている。

村上むつ子

国際基督教大学サービス・ラーニングプログラムコーディネーター/講師

上智大学、聖心女子大学で学部師として専攻分野で授業を担当

上智大学卒、コロンビア大学ジャーナリズム大学院修了（修士）

専攻:ジャーナリズム、コミュニケーション

ICUのサービス・ラーニングプログラムのコーディネーターを務め、サービス・ラーニング関連授業を講師として共同担当している。

はじめに

ICUに「サービス・ラーニング」という言葉が登場して10年近くになるろうとしています。いまでは「サービス・ラーニング」の一環と位置付けられている「国際インターンシップ」が国際関係学科に開講されたのは1996年でしたし、「コミュニティ・サービス・ラーニング」が1999年に、「サービス・ラーニング入門」が2000年に相次いで開講されました。2002年には「サービス・ラーニング・アジア会議」が本学で開催されましたし、「サービス・ラーニング・センター」が開設されました。新しい体験学習のプログラムであるだけに、授業もまたカリキュラムやネットワークづくりも手探りで続けてきました。そのような過程で積み上げられたメモや資料をまとめておくことは、今後の学生や教職員の参考のためにも、また関心がある学外の方のためにも意味のあることであると考え、このたび「サービス・ラーニング研究シリーズ」を取りまとめることにしました。その第1集は授業の教材としても使用することを考えて、これまで授業などの機会に公表してきた関連資料に手を加えてまとめたものです。用語はバイリンガルを前提に日本語、英語を原稿の用語によりそのまま掲載することを原則といたします。今後、まだまだ成長過程にある「サービス・ラーニング」の内外の資料や情報を適宜取りまとめていきたいと思えます。皆様のご参考になれば幸いですし、ご批判ご意見を賜われれば有難く思えます。

2005年4月1日

国際基督教大学 サービス・ラーニング・センター長
山本 和

Preface

Nearly a decade has passed since the concept of Service Learning was introduced to ICU. The first credit course in the name of "International Internship" was introduced in the International Studies Division, followed by "Community Service Learning" in 1999 and "Introduction to Service Learning" in 2000. ICU hosted a conference, "Service Learning in Asia: Creating Networks and Curricula in Higher Education" on June 30-July 2, 2002, and the Service Learning Center was formed in October. Since the service learning concept and experience was new to us, we have developed the concept and curriculum of service learning by gradually accumulating various papers and teaching materials for classes and presentations. In order to be a reference for the interested students and faculty members in general, we believe it would be useful to issue a "Service Learning Studies" series. This first volume "Introduction to Service Learning" is a collection of updated writings or presentation which is related to the development of Service Learning concept and program at ICU. This study series will include writings in both Japanese and English, assuming that most readers are bilingual. In the future we hope to add service learning related information and studies in the series. Your comments and suggestions are appreciated.

April 1, 2005
Kano Yamamoto
Director, Service Learning Center
International Christian University

1. 「サービス・ラーニング」とは何か

山本和

1 サービス・ラーニングの概念

本学では、学部教育プログラムの一環として、「サービス・ラーニング」の展開に力を入れている。「サービス・ラーニング」とは、学生たちの自発的な意志に基づいて、一定期間、社会奉仕活動（サービス活動）を体験させ、これまで教室などで知識として学んできたことを実際のサービス体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ新しい「体験学習」のプログラムである。学生は国内外のサービス活動を行なう機関で相当の期間奉仕活動を行ない、その経験から学んだことを整理して発表し、報告書を作成することによって正規の単位を認定される。その場合、実際のサービス体験を有意義に行ないそこから多くを学ぶために、事前に準備し心構えを持つことが必要であると同時に、実際の体験から学んだことを自ら振り返り、自分の知識に取込んで行く「リフレクション」の過程が組込まれていることを重視する新しい教育の取組である。大学のカリキュラムとして意味のあるものとするためには、学んだことを体験を通じて応用し、現実から学んで自らの知識として取込んでおくプロセスがとくに重要であると考えられる。

これは言い方を変えれば、「理論」を現実の体験から「検証」するプロセスであると位置付けることができ、リチャード・ウッド氏が述べたように大学が「象牙の塔」とならず、真の「知識を買い戻す」(Redeeming Knowledge)¹ 役割を果たすと考えられる。ボランティアと共通する要素はあるが「サービス・ラーニング」がとくに大学の教育手法として注目されるようになった所以である。

「サービス・ラーニング」という考え方そのものは、かなり歴史が古いと言われている。しかし、この概念と用語が近年注目されるようになったのは、1970年代末以降のアメリカである。その当時、アメリカの大学教育が専門性と知識の習得に偏重した結果、健全な市民社会を築く上で甚だ問題が多いとの指摘や批判が多くなったことへの危機感から、学生たちに各種のコミュニティ・サービスを体験させることによって、市民としての自覚や責任感を醸成させたいという願いを持って、東部のカレッジの学長たちが提唱して学生たちの積極的な参加を得て、急速に広まった教育改革運動がそのきっかけをつくった。この運動は、キャンパス・コンパクト (Campus Compact) として知られるようになり、現在では全米 950 以上の大学が何らかの形でサービス・ラーニングに関わっているとされる。

キャンパス・コンパクトは、主に身近なコミュニティへの奉仕活動に重点をおいて発展した。が、サービス・ラーニングを国際的な環境のなかで行えば、国際平和や人権・人道・貧困・開発・環境などグローバルな課題に取り組む人材を育成する上で極めて有意義であるという認識が強まり、「国際サービス・ラーニング」を推進する運動も盛んになった。「サービス・ラーニングのための国際パートナーシップ」(International Partnership for Service-Learning and Leadership: 略称:IPSL) は、この概念の国際的な普及を主導した国際教育 NPO (本部:ニューヨーク) である。そしてこの運動は 1995 年ころからアジアキリスト教高等教育支援財団 (United Board for Christian Higher Education in Asia: UBCHEA) によってアジアにも広められるようにな

¹ Richard J. Wood, *Redeeming Knowledge: Keynote Address for the ICU International Conference on Service Learning*, June 30, 2002

った。ICUはこの両者との連携を密接にとりながらサービス・ラーニング・プログラムの開発を図ってきており、両組織のメンバーとなってプログラム開発に当たってきた。

2 ICUのサービス・ラーニング

「リベラルアーツ、キリスト教精神、国際主義を強調して、神と人ともに奉仕する人材を育成する」というのが本学創学以来の教育理念である。換言すれば、本学は世界平和の実現を目指す人間性豊かな真の国際人を育成したいと願う教育を追求してきた。そのためには現実から学ぶ体験学習は欠かせないという認識を当初から持っていたが、「サービス・ラーニング」という新しいコンセプトを導入することによって、その教育理念はより強化されると考えて推進している。すなわち、ICUが目指すグローバル化時代の全人的教育は、特徴ある学際的なカリキュラム、専門領域の基礎を追求する学問的思考、国際的な交流と視野の拡大、少人数制ならではの人間関係を大切に作るキャンパスライフ、そして、現実の世界の問題に直接関わって学ぶ「サービス・ラーニング」が相互に作用しあって、強固なものになると考えられる。キリスト教精神は、これら全ての関係のバックグラウンドに生かされるべきものと位置づけている。

この取組の経緯と展開を簡単に振り返ると、「サービス・ラーニング」という表現こそ用いなかったが、実際の奉仕体験を重視してそこから学ぶということは、創立以来いろいろな形で実践されてきた。各種ワークキャンプへの参加やコミュニティ活動への参加は枚挙に暇がなく、宗務部が毎年春休みに実施してきた「タイ・ワークキャンプ」は、今年24年の歴史を積み重ねて学生たちに大きな影響を与えており、実際リピーターも珍しくない。地元の三鷹市と教員、学生が参加する三鷹地域開発の共同プロジェクトなども、また、その一例である。

こうした伝統のうえに立って、1991年に開設された国際関係学科が、国際的なサービス体験の重要性を認識して、30日フルタイム相当以上の無償奉仕とアドバイザーによる事前の準備と事後の報告を条件に1996年に「国際インターシップ」を開講した。これが単位を授与する「サービス・ラーニング」の取組の最初である。この国際インターシップは学生をそれぞれの関心と能力に応じて個別に受入機関に派遣する方式で実施してきたが、その成果は参加した学生にとっても、また受入機関にとっても非常に大きなものがあった。

1998年に当時の絹川学長は「学際教育検討委員会」を設置し、リベラルアーツ教育の中核となるカリキュラムの検討を行ない、「サービス・ラーニング」を大学として強化する基本方針を打出した。それに基づいて順次、「サービス・ラーニング入門」、「コミュニティ・サービス・ラーニング」が開講され、サービス・ラーニング関連カリキュラムの整備が進んだ。現在オファーされているサービス・ラーニング関連のカリキュラムは付表1のとおりである。

本学がとくに力を入れてきた国際サービス・ラーニング推進の体制づくりには、この分野に経験豊かなフローレンス・マッカーシー氏を客員教授および特別顧問として2001年度から毎春学期に招聘し、プログラム開発の指導を受けている。2002年夏にはUBCHEAと共催で「サービス・ラーニング・アジア会議」を本学で開催しアジアにおける国際サービス・ラーニング推進のきっかけを作った。これはアジアにおけるこの種の初の会議として注目され、その内容は、**"Service Learning in Asia : Creating Networks and Curricula in Higher Education June 30-July 3, 2002"**として刊行されている。そして、この会議においてサービス・ラーニングを成功させるためには大学の組織的な取組が欠かせないという結論が導かれたことも契機となって、2002年10月、全学的な取組のための組織として「ICU サービス・ラーニング・センター」が設立され、学内のサポートと国内外のネットワークづくりに乗り出すこととなった。

サービス・ラーニングを実施する具体的なやり方には多様なアプローチがある。本学は、大学全体が比較的少人数で、一つの教養学部としてまとまりをもっており、また三学期制をとって短期集中型の授業スケジュールとなっている。このような特色を生かし、本学のサービス・ラーニングは全学の学生を対象として、学生個々の関心を重視してプログラムを組む、いわばティーラーメード型のカリキュラムが中心となっている。それにより学生の関心と意志を尊

重しながら個別にサービスの現場を体験し、自ら考え学ぶ効果が強まると考えられる。サービス・ラーニング・センターは、奉仕活動先の情報を提供したり、仲介を行ったりして、ニーズに合った質の高いプログラムを組むよう努めている。

サービス・ラーニングを大学のカリキュラムとして成果の上がるものとするには、十分な準備が必要であり、またこのような機会が存在することを学内で広く理解させることが必要である。その上でかなりの期間（本学では30日フルタイム換算=240時間以上と設定）しっかりとした経験を積み、その経験を十分振り返って（内省して）知識と行動に結び付ける「リフレクション」ないし「振り返りと更なるアクション」が組み合わされることが理想である。なお、事後のリフレクションのクラス（サービス経験の共有と評価:2002年開講）への学生の参加は授業時間の割り振りが実情に合わないことと、済んだことへの関心が薄れがちとなることなどからこれまでのところ多くない。事後のリフレクションをカリキュラムとしてどう組込むかは今後改善、工夫の余地がある。体験の実施が夏休みに集中するので、その期間に専用ウェブサイトを活用してオンタイムで経験を語り合い、アドバイスをするシステムを徹底し、経験後は秋学期の早い時期に（経験のメモリーが明解なうちに）土曜日2回程度に集中してリフレクションのワークショップを行なうなどのフレキシブルな対応を検討する必要があると考えられる。

3 サービス・ラーニング・プログラム派遣先

まず、この取組を通じて体験学習の効果をあげるために、学生の派遣先の開発に工夫をこらしてきた。サービス・ラーニングによる学生たちの派遣のルートは大別して国内でサービスを行なう機関への派遣、国際的な場面でサービスを行なう機関への派遣、海外の大学を通じての海外サービス機関への派遣がある。第一の国内機関への派遣については、大学所在地の三鷹市がここ数年来連続して夏休みに本学の学生を積極的に受け入れてくれるほか、三鷹国際交流協会、東京国際ラーニング・コミュニティ、アジア学院、興望館、賛育会病院などが定期的に受け入れに協力してくれている。現在三鷹市、武蔵野市を中心に地域のNPOとの受け入れ交渉を進めている。

第二の国際的な場面でサービス活動を行なう機関への派遣は、国際NGO、国連その他の国際機関、在外公館、国際的研究機関などである。海外に派遣される機会も多い。アドバイザーとサービス・ラーニング・センターの指導のもとに、受入機関、ICU、そして学生とその保護者とが、予め活動計画・内容を合意した上で実施している。この種のプログラムは96年に「国際インターンシップ=国際サービス・ラーニング」を開始して以来の実績があり派遣先は数十ヶ所にわたっている。

第三の派遣ルートは、ICUが海外の大学とパートナーシップを組んで、大学の関与のもとに国際サービス・ラーニングの学生交流・派遣を行なう全く新しいプログラムである。この制度のもとで2003年度と04年度に、南インド（レディドーク大学、アメリカン大学）、北部タイ（パヤップ大学）、香港・中国（香港中文大学）、台湾（東呉大学）、インドネシア（ペトラキリスト教大学）、フィリピン（シリマン大学）、アフリカのマラウィ（ワシントン州立大学）に計18名の本学学生を派遣した。2005年度にも継続、強化する予定である。また、2004年春には、サービス・ラーニング・パートナーシップに基づく交換学生として、インドとタイから計4名の女子学生を本学に6週間程度招き多大の成果を挙げた。2005年度は香港、韓国、インドなどから4-6名受け入れる計画である。なおこの試行的な国際サービス・ラーニングをより良いものとするため、UBCHEAのサポートのもとで7大学のサービス・ラーニング実務者会議を2004年3月に開催し、さらに2005年9月には国際サービス・ラーニングの評価とアジアネットワーク形成のための実務者ワークショップを本学で開催し、今後の発展のための国際カリキュラムや提言を行ないたいと計画中である。

4 大学としての組織的取組

サービス・ラーニングの取組の意義・価値を学内で共有するためには、学長以下が組織として推進する決意を明確にして、組織化を図ることが重要である。本学ではこの取組の企画、実施にあたり学長の理解と支持を得て今日まで実施してきており、重要な会議やイベントは学長主催で行い、学長の参加を受けて実施してきた。海外の成功例や上記「サービス・ラーニング・アジア会議」などの検討からも、いかに組織的なコミットメントが大切であるかが強調されてきたので、トップが参加し支持する体制を極力作るよう努めてきた。これらの方針を反映して、「サービス・ラーニング・センター」設置後も重要事項は実質学長直結の運営体制をとってきた。

「サービス・ラーニング・センター」の企画運営に関して、全学的な教職員の理解と協力を得るため、「サービス・ラーニング企画運営委員会」を設置し、学部 6 学科および宗務部、保健体育部に委員会委員を決めて参加するようしており、委員会にはその他教職員も自由に参加する仕組みをつくっている（各学期 1 回程度開催）。また、センターは嘱託職員やパート職員で事務運営をしているが、学事部長のもとで定期的に事務打ち合わせを行なう体制をとっている。

サービス・ラーニングは性格上学生の関心と理解が重要であるので、発足以来いろいろな形で学生による自主的なサポートシステムを築くよう奨励し努めてきた。サービス・ラーニングをサポートする学生クラブの力は極めて大きい。現在は、Service-Learning Student Network (SLSN) がこの役を担っている。

教員のより広い参加と協力を得ることは当面の課題であるので、2005 年 5 月には Faculty Development (FD) の特別ワークショップを実施する予定であるほか、教員独自の専門分野に関連した体験学習の機会を作るプログラムを今年は強化する予定である。

前述のように 2001 年以来この分野でとくにアジアでの実績がある Dr. Florence McCarthy (IPSL のアジア担当 Vice President でもある) をこの取組の特別顧問、指導者として招聘しているが、国際的なカリキュラム指導の面でも、学生指導の面でも、教職員啓発の面でも多大の効果がある。

なお、この取組に関する経費については、その重要性に鑑み、これまで特別予算を設定して対応してきたほか、UBCHEA や Friends of ICU からもとくに国際会議、交換学生支援など国際的なサービス・ラーニング・プログラムの実施についてある程度サポートを得てきた。

5 サービス・ラーニングの教育効果

この取組の教育上の効果については、サービス経験後提出するレポートにおいて評価・報告させることになっており、また事後の報告会でのプレゼンテーションにおいても、ほとんど全ての参加者が非常に良かったという感想を具体的に生き生きと述べている。人により得るものはまちまちであるが、一般的には、「自己発見」「自信と責任感」「現実の認識」「他者のために働くことの大切さ」「進路の設定」「異文化理解」「アイデンティティの重要性」などで大きな効果があったと指摘している。現にサービス・ラーニングを行なった学生たちの非常に多くが、卒業論文においてサービス・ラーニングでの各自の体験を取扱ったテーマを選択しているし、卒業後の進路選択にあたってこの取組から学んだことが明らかに影響を及ぼしている事例が多い。

また、この取組では、受入先機関の関係部署の責任者に、サービス活動に関する評価を本学に提出するように求めており、それを成績評価に反映させるシステムをとっている。これら受入機関の評価を見ても、学生たちに対する評判は概して良く、今後も喜んで受け入れるとの評価が与えられている。

上記のように、この取組が大きな効果をあげてきたメカニズムには次のような働きを挙げることができるであろう。

- 実際にサービス体験をすることにより、世界の現実の姿を学ぶことができる。
- 現実の問題を解決する必要性を認識し、解決のための意欲を持つことができる。
- 社会のため、他者のために自分に何が出来るかを考える機会を与えられる。
- 自分が具体的に貢献できる分野を発見し、自信をもつことができる。
- 人生の意味を考え、社会に対する責任感を育むことができる。
- 実際のサービス体験を通じて、「思いやり」の心を育み、リーダーとしての自覚を持つことができる。

6 今後に向けて

サービス・ラーニングは大変有効な教育プログラムであり、とくに学際的なセッティングのなかで行なうことは、グローバル化時代に生きる学生にとって極めて有効な教育手法である。しかし、この取組は学内はもとより、日本の他大学においても、アジアの大学においても歴史が浅く、なお改善の余地が大きい。大学内においては既存の国際プログラム（交換留学、海外総合実習など）との連携、より広い教員理解を働きかけるプログラムが必要である。また関心のある国内関係大学との連携、海外の大学とのネットワークづくりを進めることによって、サービス・ラーニングを一層定着させて行くことができる。当具体化を検討したい点としては、a) サービス・ラーニング交換プログラムの継続、b) サービス・ラーニング指導のためのファカルティ・ディベロプメント、c) 国際サービス・ラーニングのグローバル・ネットワークと国内ネットワークをウェブサイト上で合体させる、d) サービス・ラーニング国際ワークショップの開催、e) サービス・ラーニングの評価に関する研究・調査の実施、f) 学生および教職員のサービス・ラーニングにおける他大学、受入機関との交流の促進などを考えていきたい。

以上

付表 1. サービス・ラーニング関係科目一覧

	春 学 期	夏 休 み	秋 学 期	冬 学 期	春 休 み
主要科目	サービス・ラーニング入門 ↓ サービス・ラーニング実習準備	国際インターンシップ実習 ↓ コミュニティ・サービス・ラーニング実習	サービス経験の共有と評価		
		(実習は夏休みに行われる場合が多いが、それ以外の時期も参加できる)			
関連科目	アジア研究への招き ↓ 社会福祉概論 ↓ 海外総合調査実習②	海外総合調査実習③	国際非営利部門の運営原理 ↓ 三鷹地域社会研究 ↓ 発展途上国における教育 ↓ 海外総合調査実習④	国際 NGO 論 ↓ 海外総合調査実習①	海外日本語教育実習
シブシブ		平和研究所フィールドトリップ			タイワークキャンプ

国際インターンシップ (IDW385) :国際 NGO、国際機関等で 30 日以上、無償ボランティア活動を行う。事前に計画書、事後にレポートを提出する。参加先はあらかじめプログラムが用意されたものと、個人で探したものを教員が承認するものの 2 種類に分かれる。

コミュニティ・サービス・ラーニング (CW330) :三鷹市、アジア学院、三鷹国際交流協会、社会福祉法人賛育会病院、地域の社会福祉施設等で 30 日以上、無償ボランティアを行う。事前に計画書、事後にレポートを提出する。

サービス・ラーニング入門 (CP066) :サービス・ラーニングの基礎 (コンセプト・意義・発

達・類型)を学ぶ。また過去の具体例、実習先 NGO 等についても紹介する。

サービス・ラーニング実習準備 (CW202) :サービス・ラーニングの実習活動に参加する学生に必要な基本的な知識、心構え、着目点を示し、サービス・ラーニングを実り多いものとすることを目的とする。

サービス経験の共有と評価 (CW203) :サービス・ラーニングの実習に参加した学生たちが経験を他の学生と語り合い、ディスカッションを行う。指導を行った教授もディスカッションに加わり、学生たちの経験が学びとして深められるよう助力する。

2. Educating the Heart: Service Learning and Shaping the World We Live In

Florence E. McCarthy

Introduction

We live in perilous times. Catastrophic events such as the tsunami of December 2004, the involvement of Japanese troops in the war in Iraq, and issues of global warming illustrates that disasters can be immediate such as the tsunami, subtle such as the constitutional implications of Japanese troops abroad, or long term such as global warming. Even the experience of volunteers who ventured to Iraq and were kidnapped there illustrates the vulnerability of everyone, even those who travel with peace and not war in their hearts to help the people most affected by violent events.

I mention these issues as they vividly set before us the challenges that we all face in answering the question: What kind of world do we want to live in? This question is particularly relevant for you students, and what you are learning, as you are the soon-to-be leaders and decision-makers who will have to answer this question and shape the future. It is your vision, your ideals, your values and principals, as well as your knowledge that will be tested in both the immediate and the long term future.

Raising this question leads directly to education and the need to assess how you are being prepared for the future, what you are learning and how you are learning it. Moreover, it is necessary to ask what do you need to know that may not be well conveyed in the current curriculum, or in our current ways of knowing. These questions are being asked by policy makers, academics and many other educated people in nations around the world. The purpose most often in asking such questions is not to blame what educators are doing, but rather to work with them to improve and enliven the educational process. In addition, it is important to make the general public and particularly governments understand the importance of the educational enterprise, and its need for continued financial support.

Now more than ever we, as educators and as students, need to be paying increased attention to issues related to the education of the heart. In the globalized world we live in, we are all aware of the power of communication technologies and their associated economies. We are aware also of the demands placed on us to participate in these economies. We participate as students – focusing on doing well in school, fiercely competing for the best grades in order to go to the best schools, having our time taken up by after-school coaching sessions, lessons, organized activities, all in order to get ahead, to get a job, to make money. We participate as consumers—we buy products, listen to music, develop tastes and ideas based on what we watch and what we see. We are workers also-attempting to use the education we've acquired to qualify for jobs in companies that will make us part of the global community and move in its pathways. These things require the fine tuning of our minds developing our brains, fine-tuning our intellect, but often at the cost of our hearts and its education.

In this article, I would like to elaborate on what educating the heart means, and in the process consider three issues. One is service learning and the education of the heart. The second is the learning part of service learning, and the third topic is service learning in other countries around the world. First, a brief review of learning theory as it applies to education.

Theories of Learning

The concern with how people learn is a well-known topic in education. Among the various theories of learning are two basic ones. One theory operates on the assumption that knowledge is abstract and exists as information, concepts, communication and other forms that can be transferred by instruction. This approach also assumes that the best way to learn is through repetition, memorization, practice and testing. The focus is on the mind and developing mental capacities to handle, absorb and analyze quantities of information, theories, data and so on. The other major approach to learning is one advocated by John Dewey, and in later years by cognitive theorists; those advocating contextualized or situated learning. In this approach, it is thought that learning is embedded in context, in social environments in which many different forms of learning take place. Students learn best when what they learn is part of the ongoing events or processes in which they are engaged. Linking learning to context assumes learning is not abstract knowledge, but is generated in the process of interacting with one's social environment. In addition, there are brain researchers who are now advocating that the best way the brain learns is through combinations of emotion, intellect, and behavior. In other words, the brain responds most positively to forms of input that uses multiple aspects of the human body in order to learn. Professor Rackham could tell you more about this. But the point for us is to consider what it means to have a broad view of learning. This is where the education of the heart comes in.

The Education of the Heart

If we think about the heart, it is the symbolic home for our deepest emotions. It is the heart that is the symbol of love, and we express deep feelings from the bottom of our hearts." In actuality we know that the heart is really an intricate pump that keeps blood circulating in our bodies. It is an organ. Nevertheless, we think of the heart as being more than a pump and something that shelters most of the feelings that give texture and purpose to our lives. This includes feelings of love, hate, fear, envy, jealousy, passion, altruism, dedication, compassion and so on. It is a symbolic source of emotion.

The heart is also an important symbolic repository for our relationships with others-family, friends, girl or boy friend and the other social relations in which we engage. The heart is the site for insight, understanding, wisdom, and other qualities that are important to our development as people of quality. These qualities of insight, understanding and wisdom only develop over time and with concerted effort, concern and nurturance being paid to them. We may be born belonging to the human species, but becoming a human being is a lifelong task, depending on both the development of the mind and the heart.

So when we speak of *educating the heart* we are speaking of the processes by which we pay attention to, and nurture the development of our emotions, our social relationships with others, and our facilities to understand, to have insight, and to learn from our experiences. These are as critical in our development as is the development of our minds. For without social experience that enables us to deal with people, to be flexible, to participate in rapidly changing situations, and to be a good colleague and friend, we will be unprepared for participation in the global arena. Moreover, without strong social relationships and skills, without sympathy and understanding of difference, we will be largely unfulfilled, isolated individuals, unable to meet the demands on us as workers, husbands or wives, parents, citizens and leaders.

Parents and schools attempt to give us ideas of what social relations are, or they instruct us in basic values, and try to give us principles to follow in living our lives, however, this is usually not part of the educational process itself, but is separate from education. As students we have little opportunity to test our parent's or teacher's lessons. We are engaged in our first profession as students which engrosses us from the age of 5 or 6 until we finish the university at 21 or 22 years. Where in that time do we have the opportunity to be

useful, to do something that we know is of value, that gives us confidence and a sense of self worth that is not tied to competition and being the best? When and where do we get to develop social skills of being friends, of learning to listen, to help other people because they need assistance with no thought of our own benefit? These are all ways and means of educating the heart and like any form of education there needs to be time and opportunity for these qualities to develop.

Service learning is one small opportunity that allows you to focus on your heart for a change rather than on just your minds. Service learning is the process by which classroom learning is linked to community service guided by reflection. While service learning occurs in an educational context, it is designed to give students a different experience of learning while at the same time helping others. *It is a way of linking the education of the heart with the education of the mind.* The notion of service is this: of doing something for others without thought of your own personal gain. It doesn't have to be a grand service, as often just a small kindness or act can bring someone much pleasure. And often from doing acts for others we gain insight about ourselves. Of course we know that people undertake to do service for many different reasons, however the basic idea of service is to act for the benefit of others, regardless of the motivation that prompts the service.

Service learning in its educational practice focuses on emotions, social relationships, the development of insight and understanding as well as on general knowledge. *In service learning theory, the linking of the heart and the mind is essential because linking experience with knowledge and reflection is a powerful tool for the development of students engaged in their own learning.* In this approach, it is not enough for students to learn facts and book knowledge, there are no answers on the internet, something more is required. The service learning approach puts a tremendous emphasis on reflection, as well as having new and different experiences, in new settings, and with different kinds of people. Reflection is critical in service learning because it requires students to think about, assess, and make up their own minds about what they have experienced during the service they are doing. This means students have to put together what they've experienced with what they know or have been learning and think about the connections. They must make inferences and develop an understanding about what has happened and why, and become more aware of the way people get along with each other, and the way activities are undertaken and resources used. This active thinking and linking of experience with knowledge makes students active in their own learning. But even more importantly, this process gives students the experience of thinking through and reaching conclusions about things, a process they can take pride in, and that can add to their own sense of self worth and self confidence.

Banking Education

In this regard, service learning is quite different from what Paulo Friere called "banking education." Banking education is a system wherein schools are purveyors of knowledge and students are treated like empty jars that need to be filled with knowledge given by a professor or someone considered an expert on a certain subject. Students go to class, the professor or teacher lectures or instructs them, the student take notes memorizes them and the readings, and eventually a test is given to see what the students have learned. The test is based on what the teacher or professor has said, in addition to what is in the books. The students are graded on how well they remember and feed back to the teacher what the teacher has assigned or told them, Each course they pass goes toward student's earning a degree, and when the jar is filled up, when they pass enough courses, students are then given a degree that certifies that they have satisfactorily filled up their jars, They then have the credential that qualifies them for employment

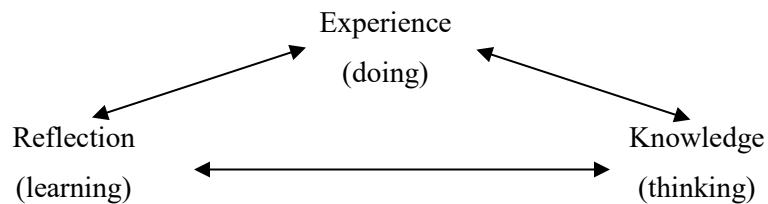
Does this sound familiar?

This banking approach is a widespread form of education. It is an example of the first set of learning theories I mentioned earlier. It is widely followed because it covers a lot of ground, it is moderately efficient in economic terms, and has set objectives by which student achievement can be measured. In addition, this kind of instruction is orderly, well understood by all participants, and clearly governed by rules and regulations.

Service learning is quite different and says that students learn in many different ways. From a service learning perspective, students learn best when they are engaged in their own learning, when they have a role in discovering what can be learned, and when they make their own conclusions about what they have experienced and what they have learned in the context of what they know. This is an example of learning stemming from the second set of learning theories I mentioned.

The Learning in Service Learning

I have found that to explain service learning it is useful to use a diagram to show what is involved. If we draw an isosceles triangle, we see there are connections among the sides of the triangle. Each side is equal in length and supports two other sides. If we label each point on the triangle with the essential elements of a service learning perspective, we see that they too are interconnected and mutually supportive.



How do these elements interact? Why are they important to us as teachers and students, and how do they help us learn and nurture our hearts?

Experience

If we start with the element of experience, we are talking about situations that provide students with the opportunity to work with other people in service related activities. The notion of service is integral to the experience being provided students, as it incorporates special opportunities for them. As mentioned earlier, service can be thought of as working for others, without the expectation of personal benefit or gain. Experience linked to service means students are working with others as a way of helping out, of being useful, of contributing to work that needs doing without putting their own needs first. The service students perform is part of the program of community agencies, local government offices, or non-governmental, not for profit organizations (NGOs) that provide support to local people. These agencies cover a wide spectrum of opportunities for students to participate in as entry level personnel. Examples of service organizations may be orphanages, community centers for elderly people, or child care centers. Community agencies may ask students to design brochures, help with a publicity campaign, attend meetings or help with the budget or the accounting system. Service may be linked to working with public health officials on water issues of a community, or with town planners designing green spaces and environmental programs for children. The tasks students undertake are real ones. Without the student's presence and their contribution, the work they have done would not have been done. Students doing service provide another set of hands to agencies, offices and NGOs. Often students begin with small tasks and are given more responsibility as they grow

with the tasks. Whatever students are asked to do, participating in service encourages students to be useful. But students are not the only ones who benefit from their service. The staff and officers in their agencies have made a commitment to help them. In so doing, the staff feel a sense of accomplishment in working with the students, because they know these students have had experiences that they couldn't have gained anywhere else.

The clients, participants, children or elderly people with whom students work also benefit from the experience. They get someone to spend special time with them, a person who can help them in filling in forms, explaining the meaning of difficult letters, or just playing games with them. These forms of exchange are very important to the people with whom the students interact. And it is in this kind of exchange that both students and others learn about each other. This is a way personal relationships are developed and fostered. An example of service from ICU students. Last summer, as many as 35 students undertook to do service in agencies located in Japan and in many other countries in Asia. Some ICU students joined students from Chung Chi College in Hong Kong to undertake service in mainland China. Some students went to Korea to teach Japanese to Korean high school students. Other ICU students assisted in various offices at Mitaka city government and became responsible for a newsletter, helped fashion local policy on taxes, and worked in the social relations department. One ICU student assisted in a hospice for patients dying of cancer. There are many ways of doing service, and ICU students are quite successful in finding interesting forms of service.

In situations such as these, this is the way university students learn to work with others, to plan and carry out events, to be responsible and provide structure and guidance for others. As another example, ICU has invited students from other Asian universities to come to ICU in order to do service in Japanese agencies or organizations. Students have come from Thailand and India, and this year will come from Hong Kong and Korea. The Thai students worked at the regional office of UNICEF in Tokyo. The Indian students assisted with caring for and teaching students at the Tokyo International Learning Center located quite near the ICU campus. For these students, their service was only one part of their experience and their learning, as they had to learn to live in another culture, meet and get along with new people, find their way around without speaking the local language, and attend classes, write their journals and manage their living arrangements and so on.

Knowledge

For experience to be meaningful, it must be supported by knowledge. To paraphrase Paolo Friere, who was an advocate of transformative kinds of education such as service learning: Knowledge without experience is abstraction. By that he meant that just knowing facts or complicated theories with no application means that knowledge remains distant and removed from practical use. However, he also said that experience without knowledge is rootless and aimless. By that he meant that just being active, doing action for its own sake often leads nowhere, and is not grounded in a plan or purpose.

So in his mind, and in that of social philosophers such as John Dewey, knowledge and experience should be linked. The most powerful knowledge comes when it is derived from the actual experience and activity of the people involved. Knowledge in this sense is what we create when we apply thought to action. Thought turns action into knowledge

Another form of knowledge is generated when students apply what they have learned from their university classes in their community service. For instance, issues of water pollution taught in a biology class or a

health class become much more real when students have to test the water they themselves drink, or test the drinking water of people in other communities. The concepts of sociology classes can be more quickly learned if students have to analyze their agency in terms of gender issues, power relations or organizational structure and function.

Knowledge both created and applied in the context of agency service becomes more alive and real to students. Because they are engaged in discovering how things work, and how concepts and issues apply to the places where they are working, they are likely to really learn the meaning of this content from their classes.

Reflection

Reflection is the third component of our triangle, and it is the most important part of service learning. It is important because reflection, that is thinking about what goes on in the agency, is critical in maximizing what students can gain from their experiences. We can think about it this way. It is possible to have all kinds of experiences and not think about them. In some cases, we prefer not to dwell on them, but just push them away. On the other hand, some people have incredible knowledge but can't use it or apply it in everyday tasks. In the United States, many employers have found this to be the case with the young undergraduates they hire. These young graduates have up-to-date knowledge about econometrics, for example, or the latest business theories. But many of them can't answer phones correctly, or take notes or write memos. Other students have technical skills regarding computers and IT, but don't know how to get along with colleagues, or work in a team. Still others can't think independently or analytically and have no confidence in their own judgment.

The importance of reflection, particularly guided reflection, is that it provides the link that connects knowledge and experience. Reflection is a way of consciously asking yourself questions about what you experienced, observed, or participated in during the day. It is asking the basic question of any situation, "What is going on here?" Reflection is based first on observation; of paying attention to what goes on around you. It also involves thinking about what you've seen. For example, "Why did the atmosphere of the meeting change today when it was announced that Mr. X was coming to visit?" "Why did Mrs S get annoyed with Mr Y? Why wasn't there any tea served? There are other questions to think about as well. For example, "How does the exchange between Mrs. S. and Mr. X illustrate what we learned in class about hierarchal relations? Or was this a gender issue? How will I know? What do I think?" These are reflective questions; trying to make sense out of what you see going on, and applying what you know. Encouraging students to actively observe and think about what goes on around them and make connections is an essential ingredient of service learning. Particularly important is making the connections between the service they do and the knowledge they gain in the classroom.

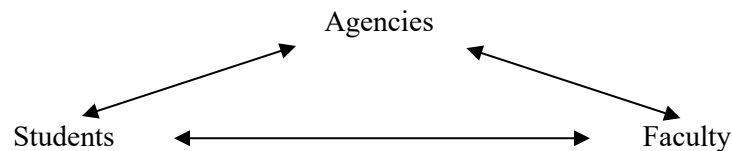
In many service learning courses, students carry the responsibility for showing their teachers what they have learned. And this demonstration is based on their own doing, thinking, and writing. By giving students assignments to do that are specific to their placements, they are encouraged to be more aware and observant of what is going on around them. In fulfilling the assignments, particularly demonstrating their learning, students have to use powers of reflection, creativity, and organization. The knowledge they need is found mainly in their own agency setting, there is no one, "right" answer,

The point is that without encouragement to be aware of what goes on around us, we tend to miss a lot. This is also true in the service students do. While they learn a lot from the experiences they have just going to their agencies, they can learn even more, by being encouraged to consciously reflect and speak and write

about what they are doing. In service learning an important goal we are trying to achieve is to get students to think more about what they are doing, to be thoughtful about the experiences they have, and to be conscious of what they have learned. We believe that once learning such skills, they can improve with practice and last a lifetime.

The Participation of Faculty and Community

In considering the major participants in any successful service learning undertaken, it is important to recognize the indispensable role each group plays: faculty, agency staff and program participants, and students. This can be diagrammed as another triangle of involvement among faculty, students and community agencies. The triangle would be as follows:



From the faculty's perspective when service is attached to course content there are many opportunities for guided reflection in the context of the classroom itself. That is, students can bring their experiences back to the classroom for a weekly discussion of what's been going on. The professor can use these experiences to help students analyze what went on, what could be done differently, and how to interpret the events that occurred. In addition, if students have been given readings related to aspects of a course curriculum and assignments to do while doing their service, these become topics of discussion in the classroom. For example, if I am teaching a sociology course and want students to learn about social roles, I may ask them to do an analysis of the roles people have in agency where they are serving. If the issue is gender, I may ask students to be aware of gender relations among staff, and among staff and participants in the agency's program. If I am teaching a management course, I may ask students to analyze the management issues in the places where they are. These can then be discussed in class and the everyday experiences of the students provide the example by which the course material may be understood. In this way, the content of the course is applied to the situations in the agencies and this helps make the concepts real, not just some abstraction in a textbook.

For the faculty, being involved in service learning classes is a way to enliven their classrooms, to encourage discussion among students, to have everyday examples from the students themselves of applications of classroom subject matter. The connections with community agencies may give rise to research topics for faculty to undertake. It may be the basis for new alliances with community members for issues facing universities and visa versa.

This discussion gives us some idea of how service learning differs from the usual classroom instruction. There are other differences as well. One example is the involvement of community people in the service learning program and classes.

For agencies working with faculty and students, service learning makes often new and important contacts for them with the university. The agencies get regular help from the students that accomplishes needed and important work of the agency. Because students are regularly at the agency, for 2 or 3 days each week during a semester, or for 30 days during the summer, the agency staff can rely on them to show up. Students can be incorporated into the work plan, and in this way students make even stronger contributions to the work that needs doing.

In service learning situations, because of the agreement among all parties, no one can just quit. This means students as well. The students become a representative of their college or university. The University, through the faculty, assumes responsibility for working out the arrangements with the agency. The agency agrees to supervise and give meaningful work to the students, and the students agree to show up, work hard, and fulfil their side of the bargain. All are partners in making the program work successfully.

Service Learning Abroad

Educators around the world are increasingly concerned with what in Japan is called the crisis of the heart." In countries such as the United States, the crisis of the heart refers to, among other things, the alienation of students from their families, school mates, and communities. While the extreme actions of the 3 students leading to the Columbine High School deaths in 2002 is the exception, it is the case that many young people in America live in very narrowly focused, self-contained worlds, which are often not inclusive, and exclude parents, teachers and other students. In many high schools in the States, service learning programs are being introduced in the attempt to make schooling more interesting and less alienating to students.

This interest in service learning began in the 1980's and grows out of a long tradition in educational philosophy regarding different theories of education. Among the questions asked have been, How do students learn? And what is the best learning environment for them? A philosopher named John Dewey, who I mentioned earlier, was an advocate of an approach to learning that actively linked giving children experiences in the process of teaching them content. This came to be called experiential education, and it is from this movement that service learning emerged.

Part of the interest in service learning is as a response to the problems presented by the disenchanting student and potential citizen. Especially in times of severe government cut-backs to education, concerned educators have had to find new ways to make schooling interesting, and moreover, make the link between school and reality, real and important. Reality in this sense means involving students in experiences that illustrate the importance of knowledge in their abilities to do make lives for themselves in the future.

The service learning programs in the States are varied, and offer many different alternatives to high school as well as university and college students. At the present time, approximately 25 percent of all high schools, and almost that number of colleges and universities engage in some type of service learning program. These programs include Campus Compact that places students in local communities for service experience, and programs such as those of the International Partnership for Service Learning that place students in combined academic-community service situations in countries outside the United States.

In Asia, there is growing interest in service learning as well, and for many of the same reasons noted above. Currently there are programs underway in colleges and universities in Hong Kong, India, the Philippines, Indonesia, Korea, Japan, in addition to Taiwan and Thailand. Moreover, interest in service learning is developing in countries such as Cambodia, Vietnam, China and Australia.

So we see that issues of educating the heart are of concern in many places around the world. This takes us back to the beginning and the world we want to live in. Service learning is an example of a pedagogy of engagement, wherein learning is connected to everyday life. A critical aspect of this is the importance of learning to appreciate the local communities and the people who surround us in our everyday lives. It is by learning to engage with and be successful in dealing with local differences that we develop the skills and insight required to understand and operate in larger environments involving greater differences. By coming to value people unlike ourselves we develop the practice of interaction and inclusion. These are skills and

talents required for a global world and for finding solutions to the problems that beset us. To fashion this world to include greater social justice and peace, we all need the education of our hearts as well as the education of our minds. *****

3. グローバリゼーションの捉え方とサービス・ラーニングの意義

山本和

グローバル化がますます勢いを増している状況の中で、真に国際社会で貢献できる人材を育成することが大学教育に求められている。ICU は献学以来人間性豊かに世界的な視野をもって社会に奉仕できる若者の教育を目指してきた。リベラルアーツ教育はまさに普遍的な人間性と国際的な視野をもって真実を追求し、現実の世界の問題に関わって行くことのできる若者を育てることを使命としており、それを「行動するリベラルアーツ」と表現している。サービス・ラーニングは、まさにグローバル化が進む中で、有為な人材を育てるうえで極めて有効かつ意義のある教育手法であるというのが、本学がサービス・ラーニングのプログラムの構築に力を入れてきた大きな理由である。この小論はそれはなぜなのか、なぜそう言えるのかを理論的に整理することによって、サービス・ラーニングの大学教育に於ける意義と認識を位置付ける一助とすることを目的としたものである。

1 グローバリゼーションの捉え方

グローバリゼーションは、いろいろな角度から論じることができるが、ここでは分析の枠組みとして次のように捉えることを提唱したい。

- 1) 現在進行中のグローバリゼーションは、人、モノ、カネ、情報、価値観、取引手法、考え方などあらゆるものが即時ないし短時間のうちに世界中に波及する現象である。こうしたグローバリゼーションは、とくに最近 10~20 年くらいの間には顕著に表れるようになったが、その背景にはつぎの三つの要因がある。第一はあらゆる財やサービスの取引や移動が世界中で行なわれることを促進した、いわゆる「自由化」または「規制緩和」の動きが世界的に進められたということがある。とくに 1970 年代以降の経済取引の自由化がきっかけとなって世界的な潮流として確立した。第二は、技術進歩とくに IT 革命と言われる情報技術の飛躍的な進歩がグローバリゼーションをもたらした不可欠の要因である。第三は、冷戦の終了により東西冷戦によって国家間の自由な交流が妨げられてきた状況がなくなり、経済、政治、文化面での交流が飛躍的に拡大したということがある。経済の自由化はすでに 70 年代後半から活発化していたと言えるが、インターネットに代表される情報技術の進展が企業レベルから市民レベルへと広がったのは最近 10 年くらいのことである。また東西冷戦終了の影響が一般化したのも 90 年代にはいつてからのことと言ってよい。
- 2) このような近年のグローバリゼーションは相互に関係する二つのチャンネルによって進行してきたと捉えることができる。第一のチャンネルは「市場経済価値のグローバル化」(Globalization of Market Values) である。これは、ごく通常グローバル化というときに意識されているものであり、市場競争原理が世界的な規範として重視されるようになったことを反映した現象である。したがってこのようなチャンネルは「主流のグローバリゼーション」(Mainline Globalization) と言ってよいだろう。
- 3) 第二のチャンネルは、「人間価値のグローバル化」(Globalization of Human Values) である。市場経済価値のグローバル化が市場経済メカニズムを通じて世界の経済取引が緊密かつ大量に繋がる現象であるのに対し、人間価値のグローバル化は、人々の価値観、生活感覚、ライフスタイルなどが世界的に波及する現象であり、量的な把握は困難であるがインターネットの普及や国連など各種国際会議での論議などに助けられて着実に進行してい

る。人類共通の課題である、人権、人道、貧困解消、環境、開発などについての大まかではあるが共通の認識が形成され世界の市民レベルに浸透するようになった。このようなグローバル化は「底流のグローバル化」(Underlying Globalization) と言ってよいだろう。

- 4) 第一の市場経済価値のグローバル化は、一般的に資源配分の効率化を通じて経済活動の活発化、成長を促進すると考えられるが、他方で市場の行き過ぎ、投機やバブルの発生、短期資金の移動などを招き、また公平性の確保、公正な分配、弱者の保護などの面で問題が多いと考えられる。市場メカニズムのグローバルな進展が望ましいとするいわゆる新古典派的な価値観が主流となる中で、人間価値のグローバル化とは相容れない問題を生じがちである。
- 5) これに対し人間価値のグローバル化は、人間が社会生活を行なううえで基本的なことから、たとえば基本的人権の保障、最低生活の保障、基礎教育を受ける機会の確保、民主的な意志決定への参加など、いわゆる人間の安全保障の必要を促すものであるが、それはともすれば伝統的な文化や価値観との対立、大衆消費文化の受け入れ、文化やシステムなどアイデンティティの喪失に繋がる危険をもはらんでいる。
- 6) このように、グローバル化は現代社会が進みつつある方向であり、それぞれ多くの良いものをもたらしているが、同時に問題をも投げかけている。しかも市場経済価値のグローバル化と人間価値のグローバル化はしばしば緊張関係をつくり出し、それが両者の行き過ぎをチェックする機能をはたすこともあれば、問題を激化することもあり得る。そのため二つのグローバル化の進展は人々の生活に不確実性やリスクをもたらす可能性を秘めていると言えよう。
- 7) 第1図 (Figure 1) の左側は、上記に説明した二つのグローバル化の特徴と相互の関係を概念的に整理したものである。

2 グローバル化時代における信頼確立とリーダーシップ

上記のように市場経済価値と人間価値のグローバル化が同時に進行するなかにあつて、個人にせよ企業にせよ非営利部門にせよ信頼を確立して行くためには、市場経済価値と人間価値の両面から求められる基本的な行動規範を満たして行く必要がある。グローバルに求められる規範は、世界の市場参加者や一般市民・消費者にわかりやすく単純に広く受け入れられるものでなければならない。例えば、たとえ耐久消費財にせよ食料品にせよ安くてそれなりの機能を果たしても、それが環境や安全や健康に悪い影響を与える可能性が明らかになるようなことがあると、そのような商品はたちどころに世界の市場から閉め出されてしまうし、成功したかにみえる政治家や政党もグローバルな価値規範から外れていると認識されると選挙等のプロセスを経て短期間のうちに失脚する現象が強まっている。

このように認識すると、グローバル化が進展している環境のもとで、どうして信頼を確保していくかが非常に大きな問題となってくる。この問題に対する私のごく単純な答えは「基本に帰れ」(“Back to the Basics”) ということである。それはなぜだろうか。グローバル化時代に生きているということは、世界の全ての人にとっての行動規範となる規範は、誰にでもわかりやすく、容易に理解できるものでなければならない。基本に帰れの「基本」とは、たとえば個人であれ集団であれ行動の主体が、コスト意識をもっているか (cost conscious)、約束を守るか、人間の安全を大切にできるか、貧困や差別の軽減を大切に思うか、環境保護に前向きか、人格やアイデンティティを重んずるか、などである。これらはいつの時代のどの社会でもそれなりに大切にされてきた事柄であるが、グローバル化時代にはグローバルな価値としての市場性や効率性、公正性、倫理性、平等性、基本的人権と人間の安全保障などの重要性が認識されて

いることが大切である。

これをセクター別に見ると、まずもっとも基本である個人レベルの信頼確立に当っては、自己の見方をしっかり持っている、正直である、約束を守る、相手を思いやる気持ち (caring) をもっているなどがどの社会においても重要な要因となってきた。これはどこの社会においてもおそらく当てはまる原理であろう。

営利企業については、利益をあげるかどうか重要な要因であることに変わりはないが、最近企業についてもその社会的責任やコミュニティに対する貢献が信頼性確立の重要な要因となりつつある。経済学や経営学は企業の利益の最大化や株主への利益配分を分析の中心に据えてきたが、近年は企業の社会的責任や企業倫理の確保が信頼確立の前提になり、それがグローバル化時代の企業の発展に欠かせないというアプローチや研究が広まってきている。アメリカのビジネススクールの講座においても、企業倫理や企業の社会的責任に関する学びが増えているが、それは上記二つのグローバル化の影響が営利企業の存在にも少なからず影響を与えた結果とっていいだろう。世界的に活躍する多国籍企業は、市場経済価値の追求と同時に人間の安全保障の確保や環境保護などの人間価値のグローバル化に敏感に反応するようになってきた。国連のアナン事務総長が提唱したミレニアム開発目標で提唱した「グローバルコンパクト」は営利企業にも人間価値の重視を訴えたものと捉えることができるであろうが、そのような呼びかけに答える世界的企業が増えてきていることは興味深い。

非営利組織（政府部門を含む）については、二つのグローバル化がもたらす影響はとくに大きくなっていると言っていい。非営利組織は NPO であれ政府機関あるいは国際機関であれ何らかの公益のために奉仕する存在である。グローバル化が進み非営利組織間の競争が激しくなると、組織の目的、事業の重点を明確にした上で、その目的に適う成果が上がっているかどうかを明確に示す必要がある。その組織の「使命」や「目標」がミッション・ステートメント (Mission Statement) やミッション・ゴールズ (Mission Goals) の形で認識されているかどうか、またそれらが使命や目標どおりに実行されているかどうかを透明性 (Transparency) をもって外に示す (Disclosure) ことにより説明責任 (Accountability) を果たすことが、非営利組織運営の基本であると捉えられるようになってきているし、制度的にも世界的な規準として要請されるようになってきている。

公益のゆえに非営利で運営される公的機関が如何に市場や社会の信頼を確保するかを第 2 図 (Figure 2) は概念的に示そうとしたものである。これは筆者が長年関わった局 (中央銀行) の信頼確立を念頭において考えたものであるが、ひろく政府、国際機関など公益サービスに携わる非営利部門のあり方に共通する経営原理を示唆するものとも言えるであろう。同図から明らかかなように、公的機関の政策は、二つのグローバル化のいずれからもサポートされなければ目的を達することは困難である。すなわち、政策は市場経済価値のグローバル化からも人間価値のグローバル化からも許容されサポートされなければならない。もし、政策が市場経済価値である経済的効率性や経済成長と矛盾するものであれば、結局は成果をあげることが出来ないであろうし、またその政策が人間価値の維持の面で公平性や公正さ、弱者や環境への配慮を欠くものであれば持続困難である。そうすると、政策実行の過程が透明性をもち、情報公開され、しかも誰にでも単純明解に理解できるかたちで、タイムリーに示されることによって、政策当局の説明責任=アカウンタビリティが達成される。そしてアカウンタビリティを示すことの積み重ねによって始めて政策当局の信頼性が確立されていくし、そのような信頼性を確立することなく政策の効果ある実施を期待することはできない。中央銀行の金融政策を例にとれば、昔は「中央銀行は行動すれども説明せず」ということが堂々と語られたことがあったが、いまや如何にして市場や国民に目的をきちっと説明し、政策決定論議のプロセスを積極的に公開して期待形成に働きかけて行くかが、何処の国においても中心的な課題となっている。これは、こと政府に限らず、NPO においても、そして営利企業においても信頼性確立の重要な条件になっ

ていると考えられる。

3 グローバル化時代の人材育成に必要とされる能力

いままで見てきたようにグローバル化を捉えると、そのなかで信頼を確立し、リーダーシップを発揮していくにはどのような能力が必要であるかが自ずから明らかになってくる。「基本に帰れ」がグローバルに適用できる原則であるとする、それは個人についても、また個人によって構成される企業や非営利組織についても、世界的にあてはまる原則であるということになる。グローバル化時代の人材育成にとって必要とされる能力について、列挙してみると次のようなイメージを描くことができるのではないだろうか。

- 1) まず、上記に示したようなグローバリゼーションの本質についての理解が必要である。上記に説明した二つのグローバル化の流れ、すなわち市場経済のグローバル化と人間価値のグローバル化を世界的な潮流として受け止める能力が必要である。もし何れか一方の流れを理解せず無視する場合には、早晚信頼の失墜を招くことを覚悟しなければならない。
- 2) グローバル化のもとでは、自らのアイデンティティをしっかりと持つと同時に他者のアイデンティティを尊重することがとくに大切である。国際社会のなかでリーダーシップを発揮するためには、相手の考え方、意見、アイデンティティをまず大切にする姿勢を身につける必要がある。
- 3) 国際社会で一般的に受入れられる原理や論理に基づいて相手と対話や議論できる能力が必要である。グローバル化のもとでは如何なる行動も世界の多くの人々によって理解されサポートされることが重要である。従って前項で述べた透明性 (Transparency) や説明責任 (Accountability) を高めること、その必要性を理解する能力を身につけることが必要である。
- 4) 素早くタイムリーに行動する能力がとくに必要である。グローバル化のもとでは、世の中は情報や環境の変化に敏感かつ即座に反応する。したがって、変化に対する迅速な政策対応が信頼性確立のために極めて重要になっている。同じ行動をとってもタイミングを失すると全く効果を生まないことになりかねない。
- 5) グローバル化のもとでは、前述の市場経済価値に対してもまた同時に人間価値に対しても敏感 (Sensitive) でなければならない。広く地球社会で通用する基本的な価値観、たとえば人格、愛、正直、公平性、効率性を重視する姿勢はグローバリゼーションのもとで信頼性やリーダーシップを確立して行くうえで欠かせない条件である。
- 6) 総合的な視野や判断力を持つことが必要である。現代は高度に専門化した社会においては専門性の高い知識や技術を身につけることが要求されることは当然であるが、そのなかにあって総合的に判断できる人間性や大局観を育むことが、グローバル化のもとで信頼を獲得しリーダーシップを発揮するために不可欠な能力となりつつある。

前出の第1図 (Figure 1) の右半分は、グローバル化がもたらすさまざまな問題のなかでどうしたら信頼を確保できるかを概念図として整理したものであり、そこでのキーワードは「基本に帰れ」 (Back to Basics) であったが、そのために要求される基本的能力がこれらの諸点で構成されると考えてよいのではないかと思われる。

4 人材育成におけるサービス・ラーニングの役割

グローバル化時代にあって、信頼を構築しリーダーシップを発揮できる人材を育成するという教育上のニーズに対して「サービス・ラーニング」は極めて重要な役割を果たすことができると考えられる。サービス・ラーニングは、学生たちの本質的な興味と自発的意志に基づいて事前の準備と関連知識の習得を行いながら進められる「体験学習」 (Experiential Learning) であ

る。サービス・ラーニングを通じて、参加者は世界の「現実」を認識し、経験したことについて考える内省のプロセス（Reflective Process）を通じて、生きた真の「知識」を身につけることができる。第3図（Figure 3）は、知識を現実の経験を通じて適応し、経験に照らしてそこから学び、そこから新たな知識を生きたものとして自ら取組み、経験に生かして行くという、知識と経験と内省が相互に働き合うサービス・ラーニングのプロセスを概念図で示したものである（1）。サービス・ラーニングはしばしば「心の教育」（Education of Heart）と言われるし、リチャード・ウッドはそれを「知識を買い戻す教育」（Redeeming Knowledge）と言った（2）。サービス・ラーニングに携わることによって学生たちは、身をもって経験したことからより深い知識を得るので、現実の問題にどう対応したらよいかに気付き、それによって現実の問題解決に当る力と意欲を与えられる。したがってそれは、参加する人に信頼を獲得する力と自信を与えるパワフルな教育のアプローチである。

サービス・ラーニングはどのような学問領域においても適用可能な有効な教育手法である。しかし、それは「リベラルアーツ教育」と組み合わせて取り入れられるとき、とくに大きな力を発揮すると考えられる。なぜなら、リベラルアーツ教育は既存の学問領域を超えた全人的教育を目指しており、専門知識のみに偏重せず人間性を持った教育を目指してきたからである。それは前述のようにグローバル化が進む現在においては、「市場経済価値」のグローバル化と「人間価値」のグローバル化が同時に進行しており、その両方を同時にバランスよく達成することによって世界に通用する信頼性の確立が可能になると考えられることと軌を一にするものである。再度第1図（Figure 1）のグローバル化の概念図において、右端の部分は信頼確立のための手法としてサービス・ラーニングとリベラルアーツの重要性と相互の関連性を表したものである。

「リベラルアーツ、キリスト教精神、国際主義を強調して、神と人ともに奉仕する人材を育成する」というのが ICU 献学以来の教育理念である。国際的には、世界平和の実現を目指す真の国際協力ができる人材を育成したいと願う教育であると言っている。「サービス・ラーニング」という言葉を使って単位こそ与えなかったが実際の奉仕体験を重視してそこから学ぶということは、創立以来いろいろな形で実施されてきた。例えば宗務部が毎年春休みに実施してきた「タイ・ワークキャンプ」は、タイの山岳地帯の村でパヤップ大学の学生と一緒に奉仕活動を行なうものであるが、24年の歴史を持ち参加者に多大な影響を与えてきたし、ICUの在る三鷹市と学生、教員が参加して行なう地域開発のプログラムも歴史を刻んできた。

図4（Figure 4）に示したとおり、ICUが目指すグローバル化時代の全人的教育は、特徴ある学際的なカリキュラム、専門領域の基礎を追求する学問的態度、国際的な交流と理解の推進、少人数制の下での人間関係を大切にするキャンパスライフに加えて、現実の世界の問題を直接体験して学ぶ「サービス・ラーニング」との相互作用によって、より強固なものになると期待している。その際キリスト教の精神は、これら全ての関係のバックボーンに生きていることを期待する。ICUが強調する「行動するリベラルアーツ」とは、現実の世界の問題に積極的に関わり、国際的な視野を持って人や社会のために奉仕できる人材の育成を目指す教育であり、その柱の一つがサービス・ラーニングであると私たちは受止めている。そのやり方には多様なアプローチがある。ICUの場合には、大学全体が比較的少人数で、一つの教養学部としてまとまりを持っていること、さらに三学期制をとっていて短期集中型の授業スケジュールとなっていることから、サービス・ラーニングは全学の学生を対象として、学生個々の関心に対応してプログラムを組む、いわばテーラーメイド型のプログラムが中心となっている。学生の関心と意志を尊重しながら、各々にアドバイザーを定め、またセンターが奉仕活動先の情報を提供したり仲介を行なったりして、個別性の高いプログラムを組み立てることを主眼としている。ニーズにあった質の高いプログラムを組むことが学生へのインパクトという意味でも、受入先との持続的関係の維持という意味でも重要であると考えられる。

註（1） Florence McCarthy, “The Fundamentals of Service Learning”, ICU Presentation Paper, 2001.

註（2） Richard J. Wood, “Redeeming Knowledge”_Keynote Address for the ICU International Conference on Service-Learning -*Service Learning in Asia: Creating Networks and Curricula in Higher Education*, ICU, 2002

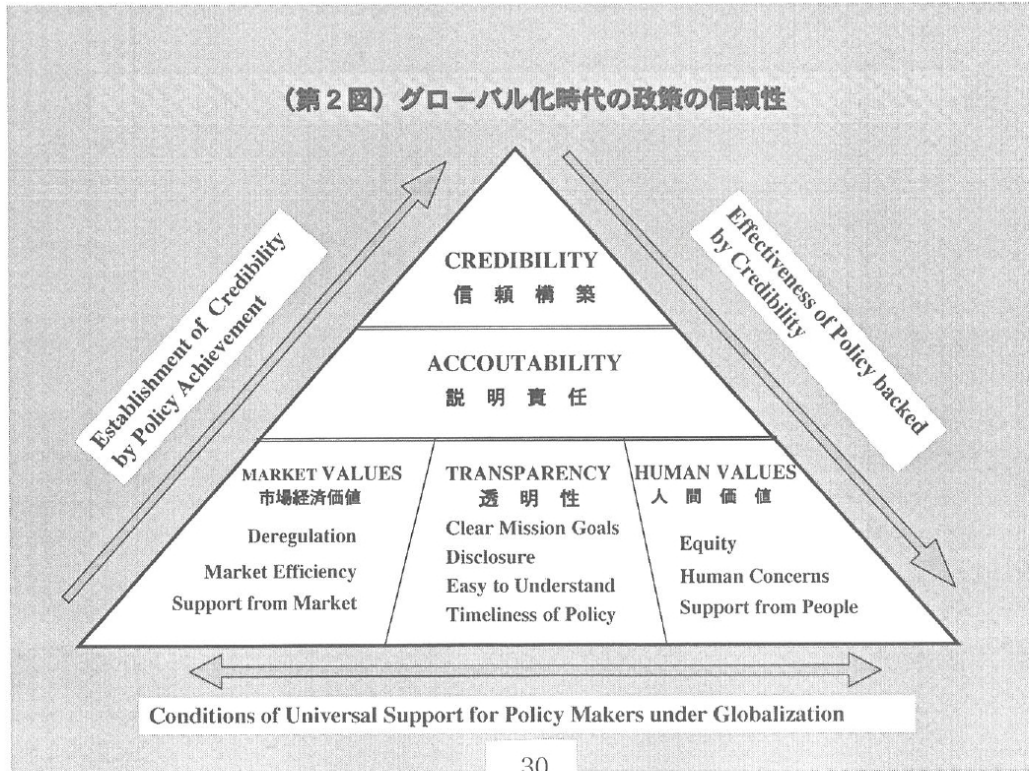
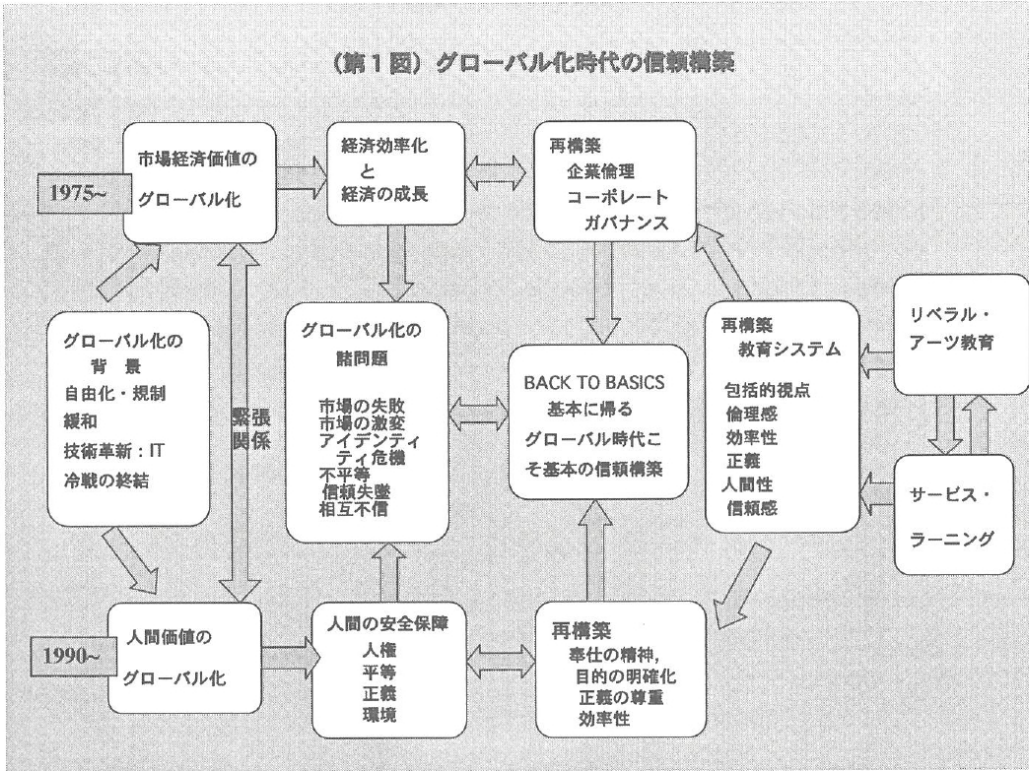
5 むすび

グローバル化の時代に信頼関係を構築し正義と倫理感をもってリーダーシップを発揮できる人材を育てるうえで、サービス・ラーニングの果す役割は極めて大きいと言えるであろう。

「サービス」または「奉仕」とは他人を愛し、そのために「行動する」ことである。「行動」を伴ってこそ真の「愛」だと言うことが出来る。奉仕活動を実践することによって人は他人を愛することを学ぶことが出来る。サービス・ラーニングがしばしば「心の教育」と言われるのは行動を伴う愛を追求するからである。行動を伴わない知識では現実の問題を解決することは出来ません。真の知識は人間社会の現実の姿を反映して築かれなければならない。前述のようにサービス・ラーニングをウッズ氏が「知識を買い戻す」方法だと位置づけたのはそういう視点からだと思う。

今日のグローバル化の進む世界のなかには、人々は異なった文化、言語、価値観をもつ人々と日々接して行かなければならない。そのような環境のなかで他者に奉仕しリーダーシップを発揮して行くためには、他者に対して愛の心をもって接し、人格の尊厳を尊重する態度を培うことが大切である。大学教育の一つの有力なあり方として、サービス・ラーニングを有効に行なうためのパートナーシップを大学のなかにも、また外部の組織や受け入れ機関との間にも広く築いて行きたいと思う。その際、何よりも学生たちのニーズが何なのかを見きわめながらそれに答えるように進めて行くことが優先されるべき課題であると考えている。

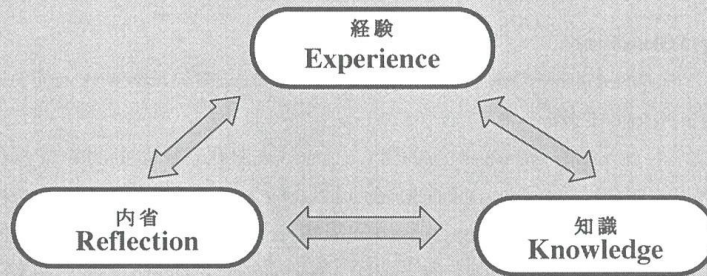
(2005.3.12)



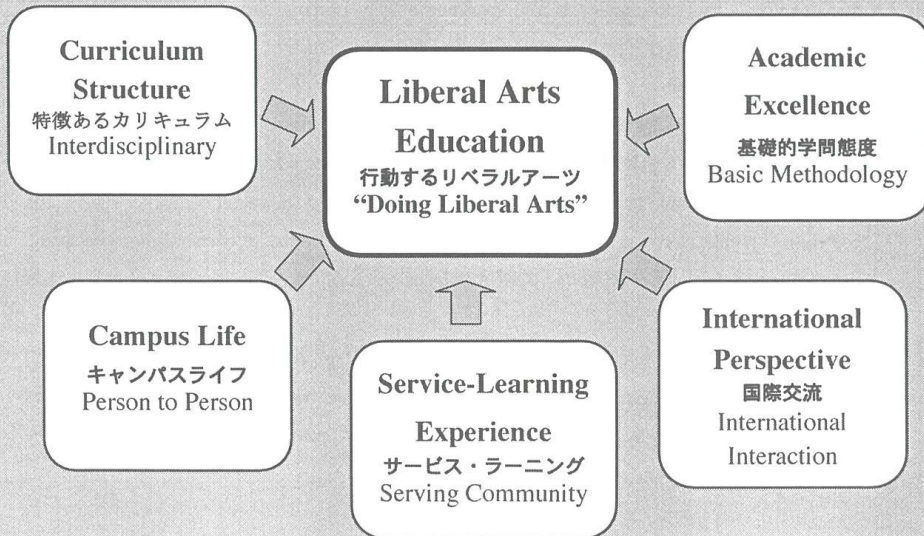
(第3図) サービスラーニングの概念

知識—経験—内省—知識

サービスラーニングは学生たちの自発的意志に基づいてサービスに携わることにより、知識を経験に応用し、また経験から学び新たな知識に加える新しいカリキュラム。単位を認定。 © Florence McCarthy, ICU



(第4図) ICUが目指すグローバル化時代の全人的教育



Role of Service-Learning In the Context of Globalization

Kano Yamamoto

The purpose of this presentation is to relate the importance of Service-Learning in the era of globalization to educating people who can establish credibility and leadership for a better world. In order to analyze the nature of the period we are living in, I would like to start with how to grasp the basic nature of globalization.

1 Meaning of Globalization

Globalization is interpreted in many ways. However, to provide useful analytical framework it can reasonably be understood in the following way:

- 1) Globalization is the phenomena where common values are shared and spread in different parts of the world in a very short period of time. Globalization has become evident in recent decades reflecting the following factors: a) liberalization or deregulation of movement of all kinds of resources worldwide, b) technological developments in particular information technology, and c) the end of the Cold War which changed the basic political relationship of the world.
- 2) Globalization can be grasped in two different channels that are interrelated to each other. One is the globalization of market economic transactions, which can be called the globalization of market values". This type of globalization is commonly known as "market globalization"; we can call it the mainline globalization.
- 3) The other is globalization of values of the people in the world. They include such values as human security, protecting human rights, human justice, environmental protection, gender equality, poverty alleviation and sustainable development. This type of globalization can be called the globalization of human values". This globalization is also spreading quickly in recent years, especially since 1990s reflecting enormous development of communication technology such as the inter-net. We may call it underlying globalization.
- 4) As shown in Figure 1, "globalization of market values" is widely accepted as promoting economic efficiency and growth, which is considered to be the major justification for promoting liberalization and deregulation of economic transactions worldwide. The trend of globalization of market values" has become irreversible. However, it often brings such problems as market failure, overshooting, speculation, mal-distribution, inequity of economic wealth, marginalization of the people or countries in a weaker position, etc.
- 5) "Globalization of human values" will promote human justice, human equity, sustainable development, environmental protection, gender disparity etc. The experience and outcome of world wide conferences organized or advocated by the United Nations and other international bodies participated by governments, academia and NGOs have proven this trend; it became particularly evident after the end of the cold war. However, it often brings a loss of traditional, individual and cultural identities, traditional values, and promotes secularization.
- 6) The consequences of globalization of market and human values are often conflicting relations. The tension between the two streams of globalization could accelerate uncertainty and risk.

2 Establishing Credibility and leadership in the Era of Globalization

Given the trend of globalization in both market and human values, credibility needs to be established by meeting both market and human value criteria. Since these criteria have to be applied globally, they have to be easily understood by global market participants as well as global citizens or consumers. For example, even if the performance of cars and electronic appliances is efficient and cheap, any products harmful to the environment, health or human security could be immediately kicked out from the market.

Then how can our credibility be established? My simple answer to this question would be “BACK TO BASICS”. Since we are living in the world of globalization, the criteria of judgement needs to be explained and understood very clearly and easily by everybody in the world. The BASICS should include such factors as; whether any individuals or entities -private or public-are cost conscious, innovative, keep their promise, conscious of human securities, avoiding poverty and discrimination and protecting the environment. Some of the BASIC values have been observed in many traditional societies, but now it has to be adjusted to the global sense of justice, ethics, equity, human rights and security,

It should be easy to understand that, in case of individuals, the person who has a full identity, honesty, keeps their promise, has a heart of caring etc., can establish credibility in any society. The same applies to different types of organizations.

In case of nonprofit organizations, including Government organizations, international organizations as well as NGOs, an explicit commitment of the organizational mission, often in the form of the “mission statement”, has become crucial in justification of the organizations because they are supported by public resources in some way or other. By clarifying the organizational mission, various priorities and activities are justified. It is often said that the money and other resources entrusted to the organization must be used for the purpose intended. To show this relationship, the transparency and accountability of the organizations must be maintained.

Figure 2 exhibits the conceptual framework how the credibility of the public policy makers (for example, central bank monetary policy) can be established and maintained. As the figure shows, the policy must be supported both by market values and human values to get the general support of the market and the people. If the policy is not bringing economic efficiency and growth, the policy will not be sustainable. But at the same time, if the policy makers fail to bring equity or fairness, it will not be sustainable either. The transparency of the entire policy operation which must be disclosed, clear and easy to understand, and timely must be ensured so that the accountability of the policy objectives will be attained. Only after accumulating the proof of such accountability, will the credibility of the public policy be established. Only after the credibility of the policy is established domestically and internationally, the policy measures will have sufficient impact on the market and on the people.

It is interesting to note that, even for-profit organizations such as private corporations, considerations of human values are getting more and more important in recent years. Economics and business theories had tended to focus on profit maximization principles, but the recent literature are calling more attention to business ethics or basic purpose of the business for their stakeholders in a broader context. Business ethics appear to be a popular subject in business administration courses and books like "Economics of Trust" are on the syllabus of the university courses. Some private multinational corporations are getting more conscious about such values as human security and environmental protection. The rationale of promoting the idea of the “Global Compact” advocated by Kofi Anan in the UN initiatives of the

Millennium Summit Goals is in line with the globalization of human values in recent years.

3 Basic Ability to Establish Credibility and Leadership in Globalization

In order to establish credibility and leadership in the context of globalization, it has become increasingly evident that certain sets of abilities are crucially needed for both individuals and organizations, non-profit or for-profit. They are identified as follows.

- 1) One must realize the nature of globalization as mentioned above. Since the two streams of globalization are a world trend we must realize and appropriately evaluate the two streams of globalization of market and human values. If one fails to realize either one of them, it would be difficult for the one to establish credibility and leadership.
- 2) One must establish identity and respect other's identity, In the perspective of globalization, you have to respect other's opinions and accept diversity as basis for leadership.
- 3) One must be able to communicate and argue based upon universally accepted principles and logic in a very simplistic way. In the era of globalization any action needs to be understood and supported by majority of the people in the world. Therefore, transparency and accountability must be maintained to get the support of the markets and the general public.
- 4) One needs to act quickly and timely. Under the globalization, the world reacts quickly to changes in information and the environment. Quick policy response to change is essential to establish credibility and leadership.
- 5) One must be sensitive to human values in addition to market values. Simple and universal basic values, such as respect for human dignity, love, honesty, and equity are key for establishing credibility and leadership under globalization.
- 6) One must establish a holistic view and judgement. In the highly specialized world, knowledge of a specialized field is required. But since globalization will bring all kinds of structural changes, the ability to judge and act from a holistic viewpoint is getting crucially important for survival and leadership.

4 Role of Service-Learning in Establishing Credibility and Leadership in Globalization

In order to meet the educational needs to establish credibility and leadership in the era of globalization, Service-Learning should play a major role in education. The Service-Learning is a form of experiential learning stimulated by students' genuine interest and initiative with appropriate preparation and knowledge. Through Service-Learning, one can learn about the reality of the world and learn real knowledge through reflective processes (Figure3). Service-Learning is often referred to as the "education of heart" and the process of "redeeming knowledge". Service-Learning can empower and motivate students to solve the local problems because the students have a deeper knowledge of reality and because they have better ideas how to deal with the real problems of the world. It is really a powerful approach to educate and establish credibility of the people who have leadership potential.

Service-Learning can be applied and useful in any discipline or area of work. However, it will be particularly effective when it is combined with "liberal arts education", because liberal arts education is characterized by a whole person education with interdisciplinary and human perspective. In this regard, let me show you the conceptual framework of the role of Service-Learning in the liberal arts setting at International Christian University as shown in Figure 4. It should be interpreted as a conceptual framework for explaining the role of Service-Learning in liberal arts education.

As you can see in Figure 4, ICU is aiming at educating students who can serve God and people through liberal arts education. What are the major components of such liberal arts education, or "whole person education?" They are:

- 1) The inter-disciplinary curriculum = wide perspective
- 2) Academic Excellence = attitude to pursue in depth study in a discipline
- 3) International interaction = exchange programs, language and communication programs, international faculty and students body, etc.
- 4) Campus life characterized by "person to person" or "face to face" education, they include small size classes, a good advisor system, a strong campus community, diverse student clubs, etc.
- 5) And most important of all: Service-Learning means = experiential education with a system of reflective process. Service Learning is an important way of nurturing students to develop a sense of justice and leadership capacity.
- 6) In case of ICU, as in many other organizations, we would like to pursue liberal arts education with a Christian orientation. In Chart 4, these basic values will form the basic background for the entire relationship in the Figure.

In short, I believe that this is the basic framework of an educational system where the concept of Service Learning can play an important role in nurturing people to develop a sense of justice, strong values and leadership capacity in the era of globalization.

Concluding Remarks

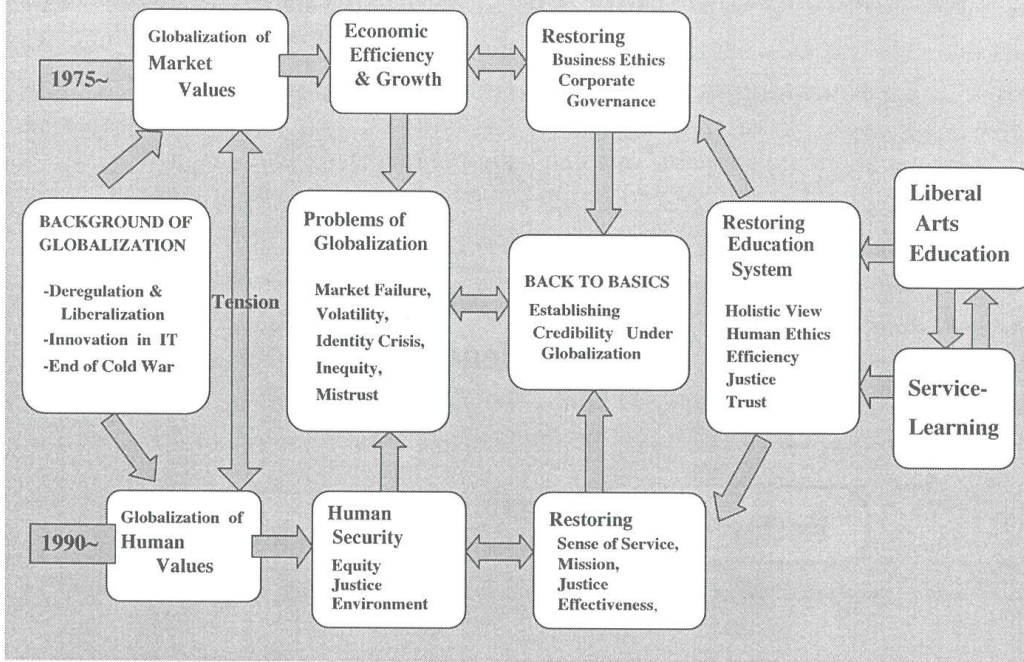
The word "service" can be defined as love other people with action. One can not truly love others without any action. By engaging in service activities you can learn how to love others. This is why the Service Learning is often called the education of heart. Knowledge without action will not solve the problems of the real world. The real knowledge must be built on the reality of the human society. This is why the Service Learning is said to be a way to redeem knowledge (Richard Wood).

In today's global society, one must interact with people of different cultures, languages and values. In order to serve others and take leadership in the context of globalization, you need to interact with people with love and with respect for other's dignity.

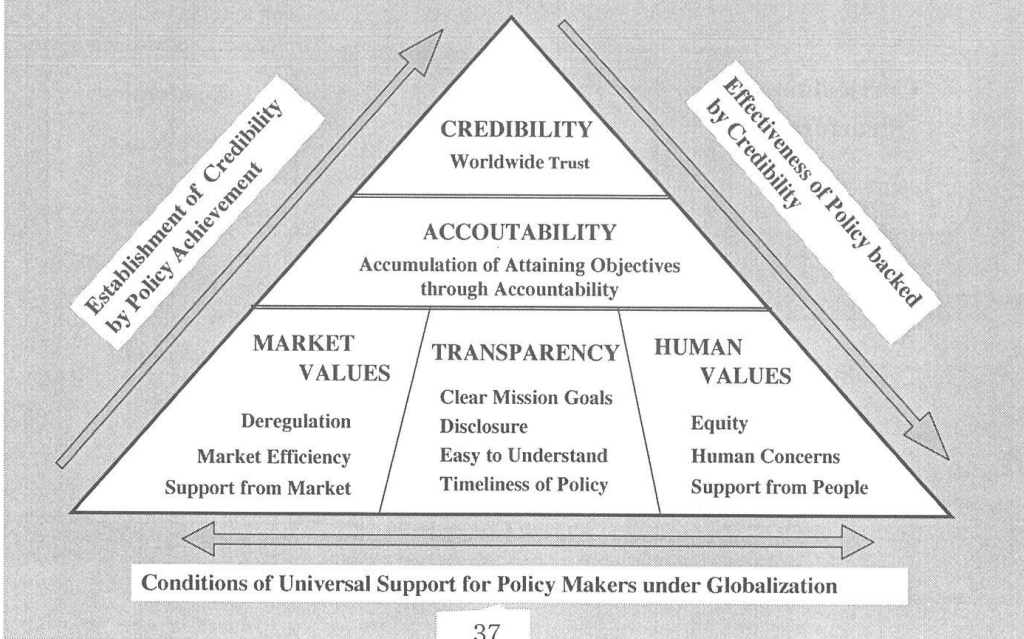
As a powerful means of university education, we hope to strengthen our partnership and network with other institutions and agencies in order to meet the needs of motivated students. Responding to the need of students should be the priority of university education.

(2005.3.12.)

(第1図) Figure1 **Establishing Credibility under Globalization**



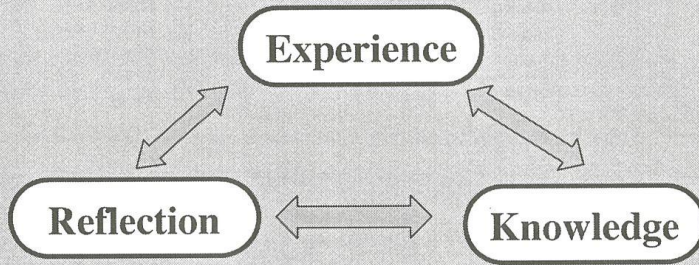
(第2図) Figure2 **Establishing Credibility for Public Policy Makers**



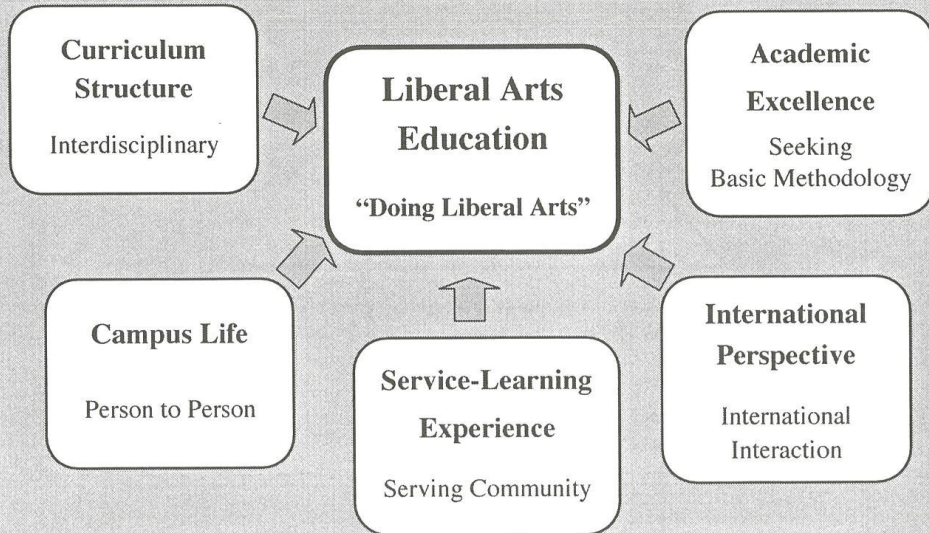
(第3圖) Figure 3 **Service-Learning, Powerful Means of Establishing Credibility and Leadership in Education**

Knowledge - Experience - Reflection - Knowledge

By experiencing services, one can learn the reality, how to deal with it, and nurture the ability to solve the issue through reflective process. It will form the basis of credibility and leadership. (c) F. McCarthy, ICU



(第4圖) Figure 4 **Concept of Liberal Arts Education at ICU**



4. コミュニティ・サービス・ラーニング-教育・大学の知・社会の変革-

西尾 隆

はじめに

本章のテーマは、「コミュニティ・サービス・ラーニング」である。このコンセプトは、「コミュニティ・サービス」と「サービス・ラーニング」を重ね合わせた考え方といってよく、コミュニティ（地域・現場）でサービスを行いつつ、その経験から奉仕の「精神 spirit」と「作法 art」を学ぶということになる。実際には、三鷹市役所、興望館（墨田区にある福祉施設）、アジア学院（栃木県にある農業指導者養成校）その他のサービス機関で30日程度のインターンシップを行うプログラムである。だが、上記の2つのコンセプトにはそれぞれ歴史的背景があり、重なり合わない要素もある。

英語圏の用法として、「コミュニティ・サービス」の語は古くからあり、今でも広く使われているが、「サービス・ラーニング」の方は比較的新しく、使用頻度も低い。そして、前者はコミュニティにおける「サービス」（奉仕）の利他的側面を強調するのに対して、後者は「学習」効果の面に重点を置く傾向があり、両者のいずれの語を用いるかに関しては、時にイデオロギー的対立さえみられるという。¹利他的なサービス行為を強調する立場は、社会変革の方向に関する政治的・道徳的傾向を含んでおり、サービスを行う当人の学習効果を重視する中立的立場とやや異なっている。

しかし、いずれの立場に立つにしても、西欧では現場と奉仕活動を重視する多様な言葉が発達している。すなわち、“community service”のほかに、“voluntarism”（ボランティア制）、“internship”（インターン）、“field education,” “field study,” “community-based education”（体験学習）、“practicum”（実習）など、多様な試みの蓄積があり、その延長上に“service learning”という新しい考え方が生れてきたといわれる。こうした経験の少ない日本では、それらの間の微妙な差異を詳しく知ることよりも、従来の教育になかったこれら欧米の試みの核心をつかみ、いわば骨太に学ぶべきであろう。

以下この章では、まず「サービス・ラーニング」（S-L）のコアにある考え方を把握するために、その意味確認から始めたい。続いて、「コミュニティ」のコンセプトとサービス機関について説明し、コミュニティでのサービスの心得について要約する。その上で、ICUの教育研究が（意外にも）コミュニティへの奉仕と結びついていることを伝え、最後に「臨床の知」という観点からまとめを行いたい。

1. 「サービス・ラーニング」のエッセンス

「サービス・ラーニング」とは、広義にとらえると、「学生が自らの選択に基づくサービス経験を通して、教室で学ぶ知識を実社会とリンクさせる新しい高等教育のあり方」と説明できよう。そのエッセンスは、以下の3点に要約しうる。

<高等教育のプログラム>第1に、サービス・ラーニングは「高等教育」のプログラムの一環として、新しい学習のあり方の一つに位置づけられている。すなわち、大学の正規のカリキュラムとして提案されているのであり、課外活動の一種でも、単なる夏休み中のボランティアとも異なる。大学の教育プログラムの中にあってもよいが、なくてもよいという程度の周縁的・付随的なテーマではなく、ICUでは「責任ある地球市民を育てる」という“リベラルアーツ教育”

の核心にかかわる重要な教育の柱である。そうして「行動するリベラルアーツ」(Doing Liberal Arts) というモットーが示すように、単に思索し、分析するためだけの知識でなく、問題解決のためになしうることを実践する、その自発的な行動力の育成を目指している。

だが、サービス・ラーニングは欧米や日本の大学にとって、新たに付け加わった一つの教育プログラムという以上の重い意味をもち、既存の大学の秩序に挑戦し、同僚や自分自身に批判の矛先を向けるような“トゲ”さえ含んでいる。2002年夏のカンファレンス「アジアのサービス・ラーニング」で基調講演を行ったリチャード・ウッド博士は、サービス・ラーニングの中に大学の宗教改革的な性格を読み取り、次のように指摘している。かつて人間の知は生活現場から紡ぎ出され、洗練され、体系として織りあげられて大学での知識となった。それは人類の遺産であり、神からの賜物でもあったが、今や大学の知識は徐々に化石化し、社会改良や助けを必要とする人々の役に立つどころか、高学歴者の利己的欲望追求の道具となろうとしている。サービス・ラーニングは、この偶像化され欲望の奴隷となった知を、大学としてリスクを冒しながら“買い戻し”、もう一度助けを求める人々のために再生させ、本来の目的に役立てようとする“贖いのプログラム”ではないか、と言うのである。²

そこまで言われると、入門コースを担当すること自体重荷に感じられるが、「知の贖いとしてのサービス・ラーニング」とは、S-L教育が自己欺瞞に陥ることへの警鐘として、担当者が座右におくべき言葉だと思う。

<教室と実社会のリンク>第2に、サービス・ラーニングは「教室で学ぶ知識」を「実社会での具体的な営み」とリンクさせる媒介的な意義をもっている。大学での学習の大半は、教室での講義や書物など通して行われる「座学」だが、従来その知識を“現実”とリンクさせる作業は十分意識されることなく、半ば学生自身に委ねられていた。ある学生はアルバイト経験を通して、ある学生はクラブ活動やボランティア活動を通して、また別の学生は想像力を逞しくすることで、教室の知と実社会の架橋という作業を無意識の内に行ってきた。あるいは、卒業後実社会に出て教室で学んだ知識を改めて深く理解する、初めてその意味がわかる、ということが一般的だったであろう。

だが、サービス・ラーニングでは、教師が意識的・積極的に学生に対してこの教室と実社会の架橋をなしうる機会を提供し、その重要性と心得を説明する。例えば「市民自治」、「NPOの台頭」といったコンセプトは教室で繰り返し語られ、文献も多く、時にはゲスト・スピーカーとしてNPOの代表が“現場”の話をすることもある。だが、学生がどんなに熱心に耳を傾け、現場の空気を感じたとしても、実際のNPO活動との間には大きなクレバスが横たわっている。サービス・ラーニングが依拠するのは“Learning by doing”の考え方である。

具体例を示すならば、この春休みに私は、数人の学生と横浜市郊外で環境保全運動を展開している「里山倶楽部」の“竹林伐採会”に参加してきた。実際にヘルメットをかぶり、鋸の使い方の方の指導を受けて急斜面で孟宗竹の伐採に取りかかるのだが、経験してみるまではこの里山保全運動の本質を理解していたとはいえないことを痛感する。年を経た竹の堅さ、噴き出す汗、枝葉を落とすコツ、切った1本の竹の重さ、数本切ったあとの消耗感と達成感、後片付けの大変さ、チームワークの大切さなど、“人から経験を聞くこと”と、“自ら経験すること”との間には決定的な差があった。

他方、1日ボランティアを経験した程度で「わかった気になる」のも危険であり、3年間で8,000本の竹を伐採して都市近郊に新しい里山風景を形づくってきた当事者の話を聞くことで、初めて見えてくる“現実”もある。現場はいわばそのスポットでの瞬間的な現実を教えてくれるが、環境のダイナミズムには話や書物を通してしか把握できない要素も多い。今回の伐採はクラスの一環ではないため、事後的・自発的にペーパーを提出したのは一人だけだったが、その体験から何を得たのかを問いかけ、課題として書かせることで、学生各自の問題意識を鍛える

ことが可能になる。サービス・ラーニングが「事前の準備（preparation）」と「事後の省察（reflection）」を重視することの背景には、“体験（至上）主義”のもつ危険が横たわっている。要するに、現場での経験を教育的見地から生かすのは、教室や活字を通しての学習と自覚的かつ冷静な省察なのである。

<サービスの精神>第3に、当たり前すぎて忘れがちな点であるが、S-Lの学習と経験のフォーカスは「サービス」に置かれている。³サービス知識の学習、実地の経験、事後の省察もすべて、“サービスの精神”を涵養するための手段である。どんなにこのテーマに関する知識が豊になり、インターンシップ経験を積んで身体性が高まり、立派なりポートが書けても、もし奉仕の心、仕える精神が育っていなければ、この試みは実に空しい。いわばICUの“T”も“U”も重要だが、“C”にS-Lプログラムの核心はある。

これに関して、最近次のような経験をした。本学でCOEセミナーが開かれ、全国から40名余りの研究者・実務家・ジャーナリストが集った。5人の院生が中心になって準備をし、当日は会議の進行をよく支えてくれた。懇親会ではその苦労を労う意味もあり、最後に参加者の前で感想を語ってもらった。皆、的確な観察と感想を語ったが、最後に立ったR君は、「実は自分はずっと会場の外にいたので内容は何も聞けず、感想も語れません。慣れないスーツとネクタイが苦しかったです」とだけ話した。

会議裏方の奉仕とは、実はそんなものである。大学院に在籍する身であれば、誰も白熱した生の議論を聞きたい。だが、「仕える」ためにはどこかで“自己犠牲”の精神も要求される。遅れてくる参加者、食堂から届く弁当やお茶の受け取り、追加のコピー、喫煙で外に出る参加者の誘導など、誰か常に会場の外にいないならならぬ。R君は、タイ・ワークキャンプの参加者の1人で、それを通して何かを学んだのかもしれないが、私にとっては印象に残る短い挨拶だった。

教師も学生も、サービス・ラーニングの「教育」や「学習」の効果にとらわれ過ぎると、いったい誰のために、何のためにサービス活動をしているのかを見失いかねない。医師のインターンなどはその典型で、若い医師を育てるための実習は不可欠であり、時に小さなミスさえ有益かもしれないが、その過程で患者を犠牲にすることは許されまい。学習すべき自分自身を忘れるような“利他”と“無私”の境地もしばしば必要である。

2. 「コミュニティ」とサービス機関（人体と器官）

さて、サービス活動を行う場は、多くの場合「コミュニティ」（地域社会）である。ICUのプログラムでは便宜上、海外のNGOなどでインターンシップを行うコースを「国際インターンシップ」と称し、国内、とくに三鷹や東京の範囲内でサービス活動に従事するコースを「コミュニティ・サービス・ラーニング」と呼んで区別しているが、あくまで相対的な違いに過ぎない（例えば、大沢にある養護学校「東京国際ラーニング・コミュニティ」（TILC）でのボランティア活動は、使用言語が英語であることもあり、学生の選択でいずれのコースで登録してもよいことになっている）。

“Think globally, act locally”という言葉が示すように、地球規模の環境・人権・平和問題を扱うNGOで活動する場合も、（抽象的な統計や制度の分析などを除けば）具体的な現場をもたないサービスというものはない。サービスを行う場は、インドであろうがタイだろうが、子供や老人の顔が見え、特定の施設や道路や林のある、具体的な地域である。そういうわけで、コミュニティに関する話は、国際派・国内派・地元派を超えた普遍性を有している。ただ、当人の外国語の能力、異文化に対する好奇心の強弱、関心のあるテーマの違い（例えば貧困問題か、都市計画か）などによって、ある学生は国際インターンシップにより引かれ、別の学生はコミュニティ・サービス・ラーニングにより強い興味をもつということであろう（この“派”の違いは

ディスカッションの面白いテーマである)。

では、「コミュニティ」とは何だろうか。「欧州共同体」(European Community)という表現があるように、コミュニティとはいっても、地域社会の近隣コミュニティから、国家を超える広域の政治・経済・文化共同体まで、その実態は多様である。現代の強すぎる「個人主義」の傾向に対して、コミュニティの意義が強調されることも多く、社会学でも政治学でも大きなテーマである。簡単な説明は容易ではないが、人為的な組織・目的集団 (association) との対比で、コミュニティは少なくとも次のような特徴をもつ。⁴

<包括性>まず、コミュニティは包括的 (inclusive) である。老若男女、子供もおり、多様な職業的・社会的背景をもつ人々が共生し、場合によってはホームレスも生活する。“ICU コミュニティ”という言葉があるが、教職員・学生とも一定の資格要件や試験によって人為的に選定・選抜されており、(ご高齢の教授はおられるが) 老人や児童、重病人・精神病患者・ヤクザなどはいない(その意味で exclusive ともいえる)。いかに ICU が多国籍・多文化とはいえ、その外にある地域社会は基本的により包括的であり、目的集団にはないメンバーの多様性をもっている。そのため、特に都市化した現代においては、人々が同じ地域で「共生」するためにさまざまなルールと装置・施設を必要とする。具体的には、病院、老人ホーム、保育所などの福祉施設、図書館や社会教育会館、コミュニティ・センター、また広域的な設置では障がい者施設や刑務所、さらにそれら特定機能を超えた地域の公的管理を総合的に担う自治体などがある。それらは広くサービス機関 (service agencies) と呼ぶことができる(これについては後述する)。

<全体性・有機性>コミュニティでは、人も自然も構造物も「全体性」(wholeness) をもち、相互に有機的に関連している。いわばコミュニティとは生き物である。そうした世界に必要なものは、全体的なアプローチ (holistic approach) であろう。

ある街に初老の A 氏がいる。A 氏はハローワーク (職業安定所) に通っており、そこでは第一義的に失業者である。だが、解雇された会社ではやり手ではないものの、経理に明るい堅実な職員だったし、地元自治体の基本計画策定に公募の市民委員としてかわり、教会の役員を務め、家庭ではよき夫で、娘から見ると少し頼りない父である。この頃ややウツ気味で、近くの病院の精神科に通っている。「失業者」や「経理担当」や「うつ病患者」というのは、どれも A 氏の機能的な一側面を取り上げたものにすぎない。地域に戻れば、それらすべての要素が混じりあった、ほかならぬ固有名の A さんである。コミュニティの中で A 氏は必要な人材であり、A 氏にとっても地域は必要である。どうも元気のない A 氏を、計画策定市民委員の有志たちがごみ処分場のスタディ・ツアーに誘ってみた。バスの中でご婦人方と話しているうちに明るさが戻り、弾みとはおそろしいもので、環境 NPO の事務局を任されることになった。収入としては不十分だが、地域に活動の場が与えられると気分は不思議に改善する。「ケセラセラ、なるようになるさ」と、病院通いも不要になった。コミュニティのもつ全体性の力である。

川の場合はどうであろうか。多摩川の支流である野川は、国土交通省から見れば河川管理・改修の対象であり、厚生労働省から見れば水質管理の対象であり、環境省から見れば自然環境 (稀少動植物) 保全の対象である。かつては農業用水として重要であり、高度経済成長期にはごみ捨ての場の観もあった。だが、コミュニティの中での野川とは、子どもが遊び、農夫が野菜を洗い、画家がスケッチし、恋人たちが歩きながら愛を語る多機能の地域資源である。震災を想定すれば防災的な役割も大きく、武蔵野の原風景として景観的な意義も高まってきた。一本の河川に対し、こうした「全体的な視点」から保全と再生の活動を展開しうるのは、コミュニティの住民と基礎自治体である。

いわば、効率優先の官僚制的・市場主義的な発想が貫徹しがちな現代において、コミュニテ

イは人や自然を全体的かつ有機的に結びつける砦なのである。

<固有名の世界>このように見てくると、コミュニティは「固有名の世界」であることがわかる。官僚はその国全体の制度や政策を考え、問題点も統計資料などの抽象的なデータから抽出することが多いが、基礎自治体の職員やNPOに参加する市民は逆に、顔の見える人、固有名をもつ具体的な自然や施設運営を相手にする。

固有名は、そのコミュニティで「生活」していない限り決して知りえない。例えば、日本人になりすましたスパイに郷里のことを聞けば、ウソはすぐにばれる（「広島のお生まれですか。もみじ饅頭をよく食べたでしょうね。どのお店のが一番おいしかったですか。宮島の棧橋前の〇〇屋のはどうでしたか」といった具合に...）。いや、仮に地域に居住していても個々の人や店の名前を知らないことは多分にありうる。要するに、固有名に関する知識は、地域への“関心”と“コミット”の関数なのである。

ところで、固有名は「名づけ」の行為によって成立する。ヒトは動物の中でも自立に著しく長い期間を要し、数年から場合によっては社会的・経済的に20年以上親からのケアを受ける。人間の親は子どもの成長に桁外れの労力を投入し、多大な関心を払い、当然ながら細心の注意と観察と祈りをもって名前をつける。名づけこそ関心の産物だからである。ホームレスも含め、すべての人に名前があるのは、必ず育て親によって名前をもらうからであり、ここにコミュニティの原点が見える。家庭がそうであり、孤児院もそうである。捨て子（棄児）が見つかり、警察は親の発見に努め、手がかりがなければ福祉施設に措置し、戸籍法57条によれば、名づけ親になるのはその基礎自治体の長（三鷹であれば市長）である。自治体がコミュニティの基盤に位置することを暗示している。

さらに言うと、関心の強さはニックネームをつける“名づけの力”にも関係する。サークルなどで仲間の特徴をズバリ言いあてると、その観察力がシェアされてニックネームになる。あだ名は社会的なものであり、あだ名を共有する集団はコミュニティにはほかならない。ただ、バカ山の名をシェアするICUもそうだが、“ニックネームの共同体”には閉鎖的な傾向があり、外部に開かれた共同体となるための努力も欠かせない。

こうしてコミュニティは、人（物）を抽象的なとらえ方ではなく、この世に1人（つ）あって2人（つ）とない、固有名をもつかけがえのない存在として受け入れるのである。

<人体の器官としてのサービス機関>さて、先にコミュニティは「生き物」だと述べたが、有機体としてのコミュニティを「人体」に譬えると、それを存続させるためにさまざまなニーズが生じ、それを担う「器官」が必要となる。コミュニティ・サービス・ラーニングで実際に仕事を行う「サービス機関」は、すべてこの器官に相当する。無機的な機械の部品ではないので、サービス機関もそのスタッフも使い捨てというわけにいかない。では、どのような機関（器官）がどのような機能を果たしているのだろうか。

子どもの成長を考えれば、まず家庭・家族が最も基本的な器官といえる。いわば消化器や生殖器のようなもので、個体と種の維持に不可欠である。次に農村型社会では、近隣社会が共同の田植えや収穫、味噌の貸し借り、子どもの世話などの役割を担う。だが、都市化した現代社会では、子育て・介護など“ケアの社会化”が進行し、機能分化した形で保育所・高齢者施設・病院がとって代わる。矯正施設は社会の秩序維持に必要なもので、毒素を分解する肝臓にも譬えられよう。「ゆりかごから墓場まで」といわれるように、福祉国家の下での自治体は、地域内で福祉・教育・医療・交通・文化・環境などの多様なサービスを担う脳神経系のごとき総合的マネジメントの器官といえる。具体例を挙げてみたい。

<興望館>東京墨田区にある「興望館」は、英語名の“Kobokan Community Center”のとおり、セツ

ルメントの伝統に立つ地域に根を張った福祉施設である。ボランティアとして、保育所や学童クラブでの子どもの相手、夏の軽井沢キャンプ、教室活動（ピアノ・茶道）、週1回の「お食事友の会」の準備と会話（お年寄りとお話をする）など、多くの選択肢がある。館長の野原健治氏によれば、社会の病理はまず子どもに現れ、今や地域最大の課題だが、興望館でケアすればどんどん良くなっていくという。そのモットーは、“God is first, you are the second, and I am the last”ということで、職員はこの精神をそのまま生きているように見え、訪問者の多くが感銘を受ける。

<三鷹市役所>三鷹市は、日本経済新聞で「日本一効率的で開かれた自治体」にランクされ、ジブリ美術館、日本初の公設民営保育所、ITのまちづくりなど話題も多く、先進政策で全国の自治体をリードしている。基礎自治体は、いわばその地域の森羅万象を扱っており、三鷹市でのインターンの選択肢も15以上ある（年度によって受け入れ部署は変わる）。ごみ対策課では、実際に粗大ごみ収集車に乗ったり、リサイクル工房で子どもの夏休みの工作を手伝ったり、現場の仕事が多い。子育て支援室では、「のびのびひろば」などで母親と子どもの交流、相談業務、一時預かりを行っており、当然子ども相手の仕事になる。生活経済課では、商店街の聞き取り調査を一軒一軒行ったり、他市のデータを集めて資料を作成したり、商店街で盆踊りを踊ったり、地域経済の実態が体感できる。その他、都市計画課、企画経営室、秘書広報課、納税課など、都市づくりのしくみ、行政運営の実験を経験でき、どの部署での経験も生涯の財産になると思う。

こうして、地域の中で特定の機能を担うサービス機関での経験は、コミュニティのニーズとその機関のミッションの有機的結びつきへの理解を促し、「責任ある地球市民」としての自覚を高めるであろう。

3. 「コミュニティ・サービス」をする心得

では、具体的にサービス機関でインターンやボランティアをする際に、どのような心得が必要であろうか。思いつくままに記してみたい。

<考えるより始める>まず、コミュニティ・サービスの最大の難関は「始める」という一事ではないかと思う。経験がない活動には不安がつきもので、当然あれこれ考える。だが、自分の直感と本能を信じて、面白そうだと感じたサービスに即着手して試みるのが大切である。電話やメールで連絡をとる、説明会があれば迷わず行く、どうするか迷ったら行動する方を選ぶ、という姿勢を推奨したい。自分に一番フィットした仕事は何か、サービス機関はどれが有意義か、自分の動機はこれでよいのか、などと考えすぎると結局、金縛り状態になりかねない。ボランティア活動には、しばしば「自分探し」的な要素が含まれるといわれ、青年期特有の正義感も相まって決断を鈍らせることがある。⁵

<できることからやる、無理をしない>「考えるより始める」という姿勢から、自然に出てくるのは、できることから始める、という心得である。子どもがあまり好きでないのに子育て支援室を選ぶのは賢明とはいえない。人間相手が苦手なら、環境NPOの河川清掃や竹林伐採などを薦めたい。ブリスベン市のボランティアセンターで入手した“Volunteers' Creed”に、“We are not trained counselor,” “We are not lawyers, we refer to experts”という一句があったが、「できることからやる」という心得は、「できないことはするな」という禁止の裏返しでもある。分をわきまえ、能力を超えた仕事をしないことが、リスク回避と持続可能なサービスの基本である。

「無理をするな」とは、タイ・ワークキャンプの経験からもそう強調したい。若さから無理をして次の日にダウンすると、逆にケアされる側になり、周囲に迷惑をかけることになる。

1997年1月の日本海タンカー座礁・重油流出事故で、何人ものボランティアが過労で亡くなったことがあったが、その自己犠牲的な働きには敬意を表しつつ、まずは自分の命と健康と安全は自ら守ることが各人の責任だと思う。

<約束を守ろう>サービス活動をする場は、いわゆる社会であり、世間である。服装・話し方など、社会人の「マナー」「常識」というものがあり、甘えや学生気分は通用しない。勤務時間に遅れないこと、アPOINTは忘れないこと、提出などの期限は守ること、その最低限の厳しさはぜひ身につけたい。ニーチェは「人は約束する能力で判断される」と語ったそうだが、ここでも「無理な約束をしない」ことを肝に銘じたい。

<チームワーク>サービス機関では、通常複数の職員が「協働」しており、チームとしての調整が不断になされている。イベント前でてんでこ舞いの仲間がいれば手伝うのが当然だし、風邪で誰かが休めば最低限の埋め合わせが必要になる。逆に、自分で仕事を抱え込んで苦しむ必要はなく、大変さを素直に伝えればよい。よくわからないときには、上司や先輩に聞くに限る。自治体職員が採用後最初に教わるのは、「報告」「連絡」「相談」（ホウレンソウ）の大切さだというが、要するに、アイ・コンタクトも含めたコミュニケーションの重要さのことである。

<メモ魔になろう>初めてサービス活動をすると、誰もが新しい体験の総量に圧倒される。私自身、タイの山岳民族との教会建設でただならぬカルチャー・ショックを受け、疲れてはいたが毎日メモを取り続けた。歳のせいもあろうが、経験したこと、感じたことは多忙な生活の中で急速に忘れていく。そこで、ぜひ小さなメモパッドをポケットに入れ、気づいたことをどんどんメモしてほしい。時々“メモ魔”の学生を見つけて感心することがある。さらに、できれば家に帰って日記（ジャーナル）をつけるとよい。私は中学1年の秋から今まで日記を続けていて、読み返すと何と悔いだらけの人生かと苦笑してしまうが、反面、事実の記録という面でも、成長の記録という意味でも財産になっている。

<人を裁くな>最後に強調したいのは、寛容の精神、赦しの心、おおらかな気持ちである。国際インターンシップを履修したSさんは、マッカーシー先生の“Do not judge”というアドバイスの意味を、インドのサービス現場で痛感したという。その体験談がまた多くの学生にインパクトを与えていた。世界は広く、さまざまな文化があり、色んな人間がいる。コミュニティは包括性と多様性を特徴とする、と述べたが、新しい環境で周囲にイチイチ目くじらを立てていては半日も生きていけない。そうした経験から、イエスの「裁くな、自分が裁かれないためである」という言葉の真意を実感するであろう。要するに、人を裁けば自分も苦しむことになり、寛容の精神の大切さを悟るのである。

先述の“Volunteers' Creed”にも“We do not judge”という項目があり、深い経験知を感じさせる。インターンを経験した学生が、「レポートには書きませんでした」と前置きをして、「世の中には色んな人がいるものですね」と感慨深く語ることがよくある（とんでもない市民がいる、といった意味で）。アルバイトでそういう経験をすることもあるに違いない。むろん誰にも、「これはだけ許せない」という行為はあるだろうし、そうした時に、自分の規範意識からあえて怒るのも決してマイナスではない。ただ私自身の経験では、裁いた時の後味は悪く、許した時の喜びは大きい。

4. ICUの教育研究とサービス・ラーニング⁶

ICUでのサービス・ラーニング・プログラムはいつどのように始まったのだろうか。カリキ

キュラムの中にこの言葉が初めて登場したのは、1999年の「コミュニティ・サービス・ラーニング」(CP201)であり、翌2000年から「サービス・ラーニング入門」(CP006)がスタートしている。その意味ではごく新しいプログラムである。だが、関係教員はこのプログラムに違和感はなく、ICUの伝統に根ざしている印象をもっている。

<国際系>本テキストの「サービス・ラーニングとは何か」の章にも記してあるが、1996年に始まった「国際インターンシップ」(IDW385)はS-Lそのものであり、公式カリキュラムではないが、田坂興亜元教授が中心になって1981年に始められた宗務部主催で「タイ・ワークキャンプ」(毎年春休みにチェンマイのパヤップ大学と合同で、山岳民族の集落に教会を建設する活動)も国際版S-Lの代表といえる。

<コミュニティ系>一方、コミュニティ系では、新津晃一教授が中心となって1990年から三鷹市の寄附講座として導入された「三鷹地域社会研究」(CP328)があげられる。これはサービス活動ではないが、三鷹市民にも開放され、市の職員たちがまちづくりのテーマに関して講義を行い、職員・市民・学生でディスカッションするユニークなクラスである。まちづくりの現場を訪問することも多く、場所も市役所やコミュニティ・センターなど多彩であり、スタディ・ツアー的な要素も強い。なお、このコースを生む母体となったのが、1988年に市とICUのジョイント・プロジェクトとして設置された「三鷹まちづくり研究会」である。市の職員とICUおよび近隣大学の研究者が、まちづくりのテーマに関して分科会形式で研究を行い、これまでに多くの提言が市政に反映されてきた。行政学専攻の院生でこのプロジェクトにかかわった者も少なくない。ちなみに、現三鷹市長は「まち研」設立以来のメンバーの一人である。

「地域と大学の関係」(TownandGownRelationship)としては、1963年の大学院行政学研究科の設立に先立って、ICU開学の1953年に設置された「農村厚生研究所」(1958年に「社会科学研究所」に改称)が、コミュニティを主たる研究対象としていた。同研究所は、フォード財団等の研究助成を受けて、『三鷹市:社会生活の諸相』、『農村の権力構造』、『地域社会と都市化』などの成果を次々と刊行したが、その理念は、「キリスト教倫理とデモクラシーを前進させる農村実態の調査研究」とされていた。いわば当時の“草の根保守主義”をいかに民主化するかという実践的な“改革”課題に取り組んでいたのである。国際的なテーマ以前に、まず足元の地域社会の問題から出発していた点が興味深い。

<教育改革>行政学研究科よりも先に設置されたのが大学院教育学研究科である(1957)。戦前期の教育の問題が太平洋戦争の遠因になっていたという認識に立ち、ICUは日本の教育を改革するために新しいリーダーの養成を使命としていた。最初にも触れたように、サービス・ラーニングの導入は高等教育の改革という性格をもっており、ICU設立の理念に深く根ざしているといえることができる。

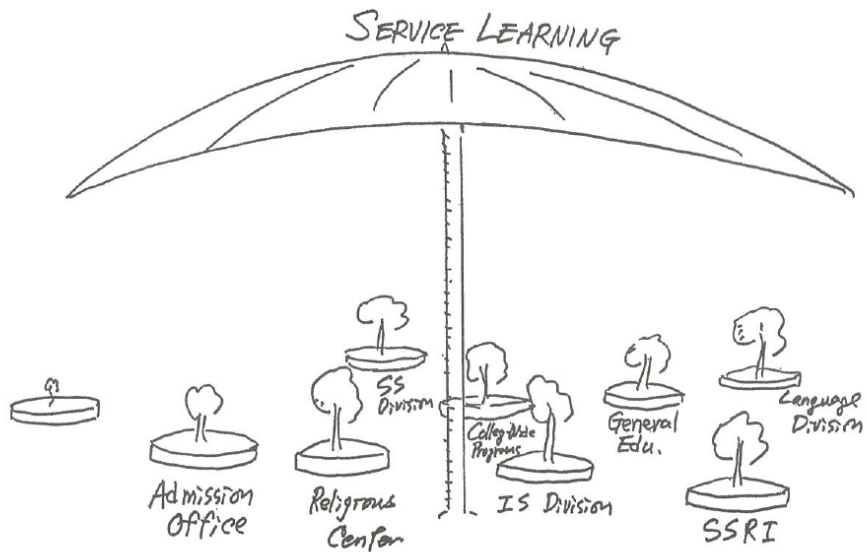
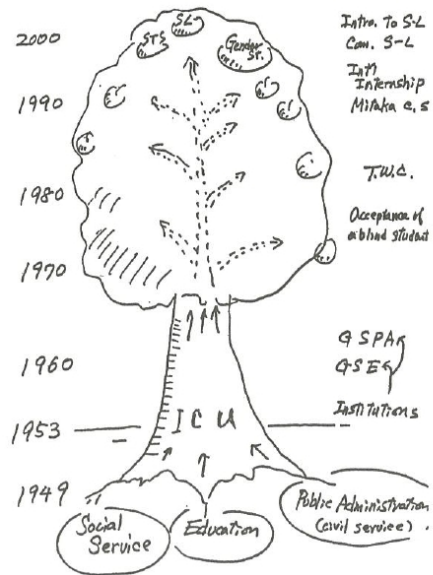
<社会サービス>さらに、ICU創立記念日である1949年6月15日の「御殿場会議」で決定された項目に、「教育・行政・社会事業の3大学院の設立」があげられていたことも忘れるわけにいかない。「教育」と「行政」の大学院設置は順次実現したが、3番目の「社会事業 Social Service」はお隣のルーテル学院が社会福祉学科を設置したこともあって、実現しなかった。だが、ICU設立の理念には「社会に対するサービス」が明確に謳われていたのであり、いわば伏流水として脈々と流れていたこの考え方が、創立50周年を機に、他のさまざまなサービスに関連する流れと合流し、目に見えるプログラムの流れとなりカリキュラムとして現れてきたといえることができる。

その理念の一端を示しているのが、視覚障害学生の受け入れであろう。視覚障害者にも大学

教育の門戸を開こうという試みは 1973 年ころから始まり、数年の準備を経て 1977 年に ICU は最初の視覚障害学生を受け入れ、以後この伝統が続いている。現在 3 名の学生が在学しているが、目が見えないという小さくないハンディを、点訳サークルや友人や教員が水も漏らさぬ結束で乗り越えていくことの教育効果、また彼女たちの類まれなる頑張りが周囲に与えている励ましの効果は何ものにも代えがたい。この点において、まことに ICU は外部に開かれたコミュニティであることを実感する。

<ICU におけるサービス・ラーニング>次の頁のイメージ図（上）は、ICU におけるサービス・ラーニングが、設立時から実は図らずも用意されていたプログラムであることを示そうとしたものである。今、その（まだ少し青い）果実として S-L プログラムを提供しているわけだが、それがどのような土壌（理念）と幹（歴史）から生み出されているのかを理解していただきたい。

また下の図は、ICU の草の根レベルから、体験学習やサービス活動が自然発生的に育ってきている様子を示したもので、サービス・ラーニングのコンセプトは、事後的にそれらの試みをアンブレラで覆ったものであることが理解できよう。アメリカ合衆国の建国と同様、いわば“連邦制的”に、「サービス・ラーニング」というシンボルの下、個々の自律的な教育研究プログラムを有機的かつ緩やかに結びつけようとしているのである。すなわち、ICU の S-L プログラムはボトムアップ型・分権型をベースにしつつ、S-L センターの設置によって新たな相互調整が行われはじめた、と理解できよう。



おわりに

「コミュニティ・サービス・ラーニング」は公式のコースとなってようやく 6 年が経過した、まだ若いプログラムである。担当者としては依然手探り状態が続いているが、ICU の創立者や先輩たちの敷いた確かな路線を進めばよいという安心感も同居している。

また、このプログラムは以上で説明してきたように、コミュニティやサービスに関する多面的な理解を要求し、現場では忘れてはならない心得も数多くある。だがその本質は、考え込むよりも、まず動き、現場に赴き、サービス活動に着手する「身体性」を育てることにあると思う。「とにかく始めてみること」、このメッセージを忘れないでほしい。

国際系であれコミュニティ系であれ、サービス・ラーニングは個別指導 (individualized education) を基本としている。こうした形でテキストを書いたが、“Volunteers' Creed”のようにいわば諺として一般的に伝えられることは多くない。考えずに行動を起こすタイプの学生もいるわけで、「とにかく始めよ」というメッセージでさえ決して普遍的とはいえない。結局、学生本人が現場から学ぶ意欲をもち、教師とサービス機関を含めた“コミュニティ”がこれを多面的にサポートするのが、サービス・ラーニングの本来の形なのであろう。

最後に、このプログラムから得られる新しいタイプの“知”はどう名づけるべきであろうか。私は哲学者の中村雄二郎氏にならって「臨床の知」と呼んでみたい。¹言うまでもなく、これは医学のアナロジーであり、基礎医学・病理学等の知識に対する、臨床の知、患者に寄り添う者の医療行為、介護、励まし、慰めなどの実践的な知の力を問題にしている。それは、“分析の知”に対する“総合の知”であり、近代科学が軽視してきた「共通感覚」(commonsense) に出発する必要があるという。

そして、「普遍性からコスモロジー (物語性) へ」、「論理性からシンボリズム (象徴性) へ」、「客観性からパフォーマンス (一回限りの演出) へ」のシフトが“人類の知の組み替え”として提唱されている。言葉はややむずかしいが、要するに、書物の中の動かぬ真理を覚えるよりも、例えば ICU でこのプログラムが形成された歴史を理解し、サービス経験から自らの物語を紡いでいくことの方が大切であり、ロジックよりも個別の象徴的事象 (例えば環境破壊の科学的論拠よりも、トキが絶滅した事実の意味) の方が社会変革の力となり、客観性をかざす知識よりも、身体性をもった一回限りの現場での行為の方が人々を動かす、ということを描いているのである。

サービス・ラーニングの世界は、入り口は単純にして、その奥は無限ともいえる広がりをもっている。

注

¹ See, Pritchard, I. A., “Community Service and Service-Learning in America,” in Furco, A and Billing, S. H. ed., *Service Learning: the Essence of the Pedagogy*, Information Age Publishing, 2002, p.6 ff.

² See, Richard Wood, “Redeeming Knowledge,” in *Service-Learning in Asia*, ICU, 2002, pp. 41-44.

³ 冒頭に触れた「コミュニティ・サービス」と「サービス・ラーニング」の立場の違いにも関係するが、日本ではボランティア経験が進学や就職時に「評価」され始めたことで、極論すれば自分の利益のために、他者性を身につけることなく、サービス活動に従事するという危険がなくはないのである。

⁴ コミュニティのコンセプトに関しては、古典的な議論として、R.M.マッキーヴァー、中久郎 他監訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房、1975 参照。最近のテキストでは、倉沢進『コミュニティ論』放送大学教育振興会、2002 がある。

⁵ この点から、筋ジストロフィー患者に対する福祉ボランティアたちの生態と心の葛藤を描いたルポルタージュ、渡辺一史『こんな夜更けにバナナかよ』北海道新聞社、2003 は一読に値する。

⁶ 本節の内容に関しては、see, T. Nishio, "The Nature of ICU's Service Learning Curriculum," in *Service Learning in Asia*, ICU, 2002, p.167 ff.

⁷ 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992 参照。

5. 日本語教育とサービス・ラーニング

佐藤 豊

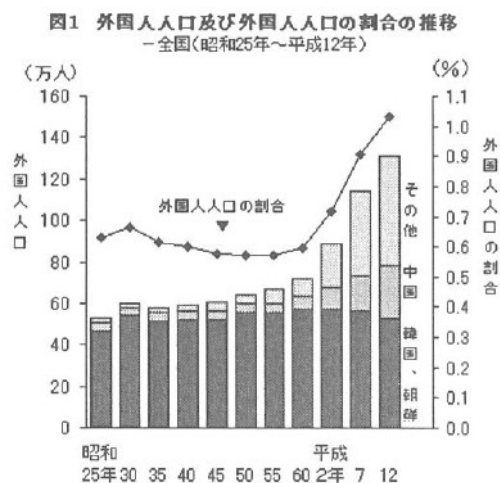
1. はじめに

現在、一般的に日本語教育は職業であり、日本語教師となるためには、専門的な知識や経験を要すると考えられています。しかし、日本語を母語とする人は、日本語の言語知識・コミュニケーション能力を持っているわけですから、たとえ、日本語学習者に、効率的な教え方・適切な説明を与えることは難しくても、話し方や書き方のモデルを与えたり、ある話し方や書き方が適切かどうかについての判断を教えたりすることは可能です。また、日本語で話す練習相手にもなれるでしょう。つまり、日本語学習者の手伝いをする潜在的な能力が、ある程度備わっていると言うことができると思います。このような能力を活用し、さらに、望ましくは、適切なトレーニングを受け、日本語教育を職業としてではなく、社会参加の一手段として活用する方法をここでは紹介します。

社会参加の一形態と書きましたが、日本語教育とサービス・ラーニングという関係においては主題となるものがあります。それは、東アジアの人々との関係です。日本語教育を通してのサービス・ラーニングは、特に、中国人・韓国人と接する一つの方法を与えてくれると言えるでしょう。それは、以下に示すように、日本語学習者の多くの部分を中国人・韓国人の方々が占めているからです。隣国との交流を深めることはもとより大切なことです。が、特に、近代史において東アジア諸国を侵略した日本にとっては、中国人・韓国人と接することは、過去の歴史を正しく認識するためにも、将来の友好関係を構築するためにも、重要な課題だと思われる。さらに、「日本語教育」という方法が、それ以外の国々の人々とも接触する機会を与えることができることは言うまでもありません。

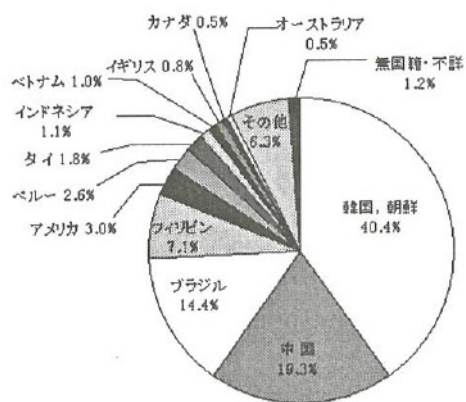
2. 在日外国人の増加

総務省統計局¹⁾によると、2000年（平成12年）に、日本にいた外国人は、131万1千人で、日本の総人口の1.03%を占めていたということです。図1²⁾が示すように、歴史的な理由から永住権を持つ60万人弱の在日韓国人・朝鮮人が日本に在住していますが、近年それ以外の人々が近年増加しています。その他の外国人の多くは、総務省統計局の数字が示すように（図2³⁾）、中国人、ブラジル人、フィリピン人達です。図2から、中国人・韓国・朝鮮人が在日外国人の60%を占めることが見て取れます。これらの数字は、外国人登録をした人たちの数であり、外国人登録をしていない人も合計すると180万近い外国人が住んでいる（田村 2000:5）とも言われています。これらの外国人の多く（62.8%、2000年現在、総務局統計局⁴⁾）は、日本で働いていますが、日本に留学に来る学生の数も年々増加しています。1983年には、中曽根（前）首相が「留学生十万人計画」を提唱し、2003年にはそれが達成されました。



このように在日外国人が増加してはいるものの、これらの在日外国人にとって、日本は居心地がいいところとは言いがたく、多くの法的・社会的な差別が存在していると指摘されています（田中 2002）。現在、これらの在日外国人との共生を目指して、行政およびボランティアの対応が始まっています（長澤 2000、田村 2000）。そして、「日本語ボランティア」という形の在日外国人との接触も盛んになりました（日本語ボランティア講座編集委員会 1996、岡本 2000、石田ほか 2002）。政府は、少子化による労働力不足、学生数の減少の対策として、外国人労働者受け入れ、留学生の質的向上を考慮しており、在日外国人増加はこれからも続くと考えられます。⁵

図2 外国人人口の国籍別割合-全国（平成12年）



3. 日本語教育

2 節において、在日の外国人が増加していること、彼らとの共生を目指し、日本語ボランティアを含む様々な対応が始まったと書きました。この節においては、世界における日本語学習者の数、日本国内における日本語学習者の数、日本国内のボランティア働きということについて見てみましょう。

世界の日本語教育

国際交流基金の調査によると、2003 年に海外において約 235 万人の人が日本を学習しているとのことです（国際交流基金 2003⁶）。この中で、東アジアの日本語学習者は、61%（1,438,425 人）を占めています。国別に上位 5 カ国を見ると表 1 のような状況です（国際交流基金 2003）。

表 1. 国別日本語学習者（上位 5 カ国）

国名	割合	人数
韓国	37.90%	894,131 人
中国	16.50%	387,924 人
オーストラリア	16.20%	381,954 人
アメリカ	5.90%	149,200 人
台湾	5.50%	128,641 人

この中で特に注目されるのは、韓国です。韓国は世界第 1 の日本語学習者数を有しており、その 7 割が中学・高校における日本語学習者となっています（国際交流基金:日本語教育国別情報⁷）。

国籍別の国内の日本語学習者

上に海外における日本語学習者の状況について書きました。国内に目を向けると次のような状況であることがわかります。文化庁の報告（「平成 14 年度国内の日本語教育の概要」⁸）によると、2002 年において国内の日本語学習者の総数は、126,350 人で、国内の日本語学習者の

82.1% (103,770 人) がアジア地域出身者です。特に、中国と韓国からの学習者は全体の 65% に達しています。

表 2. 「平成 14 年度国内の日本語教育の概観」受講者数 (国・地域別) (一部修正) ⁹

国・地域名	大学等機関	一般の施設・団体	学習者数
中華人民共和国	22,317	43,942	66,259
大韓民国	4,182	12,173	16,355
アメリカ合衆国	1,173	3,883	5,056
台湾	1,278	2,426	3,704
ブラジル連邦共和国	144	2,968	3,112
フィリピン共和国	196	2,606	2,802

国内の日本語教育

上で 2002 年における国内の日本語学習者の総数は、126,350 人と書きました (文化庁「平成 14 年度国内の日本語教育の概観」) が、表 3 が示すように、その 70% (89,455 人) は、一般の施設・団体で日本語教育を受けていることがわかります。

表 3. 「平成 14 年度国内の日本語教育の概観」概観 ¹⁰

		機関・施設等 数	教員数	学習者数
大学 等 機関	大学院	30	110	985
	大学	401	4,152	32,990
	短期大学	108	438	2,667
	高等専門学校	55	95	253
小計		594	4,795	36,895
一般の施設・団体		1,031	22,577	89,455
合計		1,625	27,372	126,350

一方、「一般の施設・団体」における教員の割合を見ると、表 4 にあるように、60% 近く (13,339 人/89,455 人) がボランティア等の資格で教えていることがわかります。

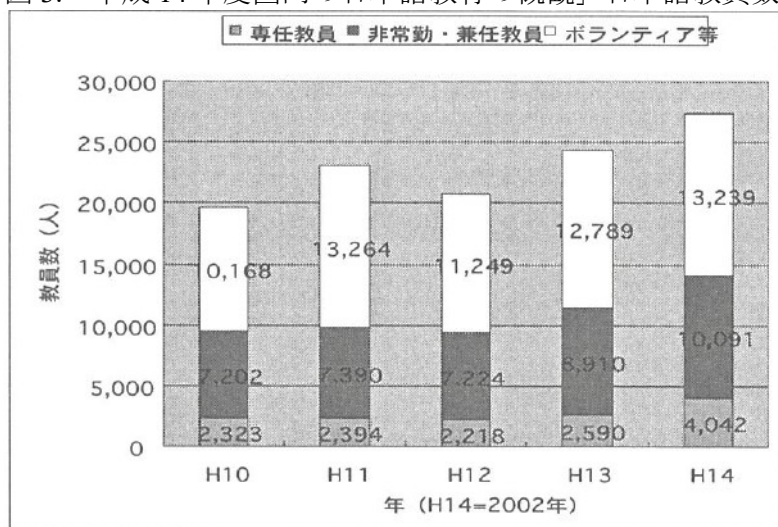
表 4. 「平成 14 年度国内の日本語教育の概観」一般の施設・団体における主な日本語教育対象者別施設・団体数,教員数,学習者数 ¹¹

主な日本語教育対象者	施設・団体数	うち（財）日本語教育振興協会の認定施設数	教員数				学習者数
			専任	非常勤・兼任	ボランティア等	計	
地域の居住者	603	10	1,051	1,211	11,685	18,947	30,013
大学・専門学校等在校生、又は進学希望者	281	261	1,246	2,461	518	5,225	40,107
技術研修生・技能実習生	36	1	46	650	304	1,000	2,558
インターナショナルスクール等在校生、又は、在日米軍関係学校在籍者	18	1	62	42	2	106	4,589
その他	129	36	337	1,232	730	2,299	12,188
計	1,067	309	2,742	6,596	13,239	22,577	89,455

*1 施設・団体で対象者別に教室を開設している場合は、それぞれの対象者ごとに施設・団体数を計上している。

日本語教員の全体に対する、ボランティアの数は、図3が示すように、50%に達していません。ボランティアがいかに重要な役割を果たしているかを見て取ることができます。

図3. 「平成14年度国内の日本語教育の概観」日本語教員数の推移（一部修正）¹²



3. 「コミュニティ・サービス・ラーニング」と日本語ボランティア

「コミュニティ・サービス・ラーニング」における日本語教育のボランティア活動は、2001

年に始まりました。私が担当した 2001 年・2002 年においては、それぞれ 9 名ずつの参加者がありました。2001 年から 2004 年までの参加者の活動先は以下のとおりです。（括弧内の人数は、コミュニティ・サービス・ラーニングを受講してはいないが参加した ICU 生の数です。この学生数は 9 名の中には含まれていません。同一人物が二つ以上の受け入れ先で活動していません。）

2001 年度

- 第三鷹国際交流協会（MISHOP） 8 名
- 調布国際交流協会（CIFA） 1 名
- 世田谷日本語クラス 1 名
- 世界の子どもと手をつなぐ学生の会（CCS） 1 名
- 韓国 YMCA 1 名
- 安康女子高等学校（韓国） 4 名
- 善徳女子高等学校（韓国） 1 名（+1 名）
- Payap 大学（タイ） 1 名

2002 年度

- 三鷹国際交流協会 8 名
- さくらの会 1 名
- 安康女子高等学校（韓国） 2 名（+1 名）
- 亀烏女子高等学校（韓国） 3 名
- 京花女子高等学校（韓国） 2 名

2003 年度

- 京花女子高等学校（韓国） 1 名

2004 年度

- 京花女子高等学校（韓国） 2 名

以下にコミュニティ・サービス・ラーニングにおける活動を紹介します。5 月の初めに「サービス・ラーニング入門」のクラスで、日本語教育におけるボランティア活動についての講義が 1 時間あり、その後、残りの春学期および夏休みの一部分の間に、ボランティア活動の準備と受け入れ先探しが行われます。2001 年および 2002 年においては、春学期に定期的にミーティングを重ねて、日本語教育の教材の紹介、模擬授業、受け入れ先の紹介・斡旋などがなされました。学生たちの所属学科は多様で、言語学・日本語教育に関するコースを受講していない人がほとんどでしたので、非常に基本的な日本語教育教材・授業の紹介をしました。その他、2001 年度には、国分寺市にある光公民館にボランティアの日本語を見学に行き、2002 年度は、韓国に行く前に 2 日の韓国語のレッスンと秋学期の集まりを 2 回行いました。

日本語教育のボランティア活動の多くのパターンは、次のようなものです。

2001 年度・2002 年度における典型的な日本語ボランティア活動:

- (a) 春学期後半、夏休みの一部、および秋学期を通して、週 2 回、2 時間ずつ、三鷹国際交流協会などにおいて、日本語を教える。
- (b) 夏休みの間、2 週間、韓国の高校に行き、日本語のクラスを手伝う。春休み後半、夏休みの一部、および秋学期を通して、週 1 回、2 時間ずつ、三鷹国際交流教会などにおいて、日本語を教える。

いずれの場合も、早期に、三鷹国際交流協会に登録し、ガイダンスを受けることが必要です。

次の資料は、春学期の初めのミーティングで配布されたもので、どのような課題があるかが記載されています。

2002/05/16 CSL (CP201)
1. 提出物・成績その他
30日の実習
提出物
(1) 春学期末までに：1. 計画書（春学期末）、2. 「今回の CSL 参加の目的・期待」（春学期末）、3. 誓約書・覚書・計画書（MISHOP、海外などに行く場合）
(2) 秋学期末までに：1. ジャーナル、2. エッセイ
ジャーナル
<ul style="list-style-type: none">● 学習者のプロフィール（日本語のレベル、学習歴、目的）● いつ？● どこで？● 何を？（語彙・文型・教材名ページ）● どのように1？（どんな活動、問題、教材を使ったか）● どのように2？（準備は何をしたか。何を参考にしたか。何を留意したか。）● コメント（どのような質問が出たか。どのように説明したか。何が難しかったか。）
エッセイ
<ul style="list-style-type: none">● 学習者のプロフィール・状況・日本語学習の目的● 学習者と日本の関係は？（日本観、日本への関心・感情）● 自分と学習者の関係は？（年齢、背景の違い、家庭、育った環境、日本におかれている立場の違い、考え方、社会・文化・経済的な困難）● 何を知ったか。<ul style="list-style-type: none">➢ 相手の理解➢ 国際化➢ 異文化接触➢ 対人関係➢ 機関➢ 日本語教育➢ 日本語学習者

基本的な提出物は、次のようなものです。

日本語ボランティア活動に参加する場合の提出物:

- (a) 春学期末に、計画書とサービス・ラーニング参加の目的・期待を書いたエッセイを提出

する。

- (b) 秋学期末に、日本語ボランティア活動の記録となるジャーナルと、ボランティア活動後のエッセイを提出する。

成績は、準備時のミーティングへの参加、上記の提出物（およびその内容）、活動内容、受け入れ先の評価などを総合してつけます。すでに、書きましたが、日本語教育のボランティアを通して、社会参加することが期待されているわけですから、「社会人」としての責任ある行動をとっているかどうか、ということも評価の対象になります。活動期間を通して、電子メールなどによる連絡を取り合うことが多くなります。特に、海外に行った場合には、頻繁に連絡・報告することが必要となります。

参加する学生達の多くは日本語教育についての知識はほとんどないことから、サービス・ラーニングにおいてそれらの人々が提供できる「知識」とは基本的には母語として持っている日本語と日本社会・文化に関する知識となります。在日外国人に日本語を教える場合は、主に日本語会話の練習の相手・日本人の友人としての話し相手という役割が期待されていたようです。韓国においては、学生達は日本語の母語話者としての発音、日本に関する情報源、また、年齢も近い実際の日本人の若者に接する機会を提供しました。彼らの存在は、韓国の学生達には非常に刺激になり、日韓の交流に非常に役立ったと高校の先生方からうかがっています。

McCarthy 先生 (2002) は、サービス・ラーニングは「心の教育 (educating the heart)」のために行われるものだと指摘されました。

Service learning is one small opportunity that allows you to focus on your heart for a change rather than on just your minds. Service learning is the process by which classroom learning is linked to community service guided by reflection. While service learning occurs in an educational context, it is designed to give students a different experience of learning while at the same time helping others. It is a way of linking education of the heart with that of the mind. The notion of service is this: of doing something for others without thought of your own personal gain. It doesn't have to be a grand service, as often just a small kindness or act can bring someone much pleasure. And often from doing acts for others we gain insight about ourselves. (McCarthy, 2002, p. 3)

日本語のボランティア活動においては、日本語の母語話者が今まで習得・学習してきた日本語・日本文化に関する知識を、異文化の人が知ることを助けることになるわけです。ただし、「日本語」を習おうとしている在日外国人も在外の学習者も、求めるものは言語以上のものがあり、まさに心のふれあいというところにあると思われれます。そのようなふれあいを通して、日本語ボランティア自身も、様々な課題について気がつくことができることと思います。

4. おわりに

私は、コミュニティ・サービス・ラーニングにかかわって、学生と今までとは全く違う関係を作ることができたことを大変幸運だったと思っています。サービス・ラーニングは学生達が経験を得るプロセスではありますが、私自身、学生達とともに（成長する）経験を共有しているような気がしました。学生達の困難は自分にとっての困難であるし、学生達の喜びは自分にとってうれしく感じられました。そのように感じたのは、問題が起こったときに相談相手になったことと、彼らのジャーナルとエッセイを読むことができたことに起因すると思います。また、このコースを受講することにより明確な目的意識を持つようになった学生が何人かいました。エッセイのひとつに「私は今回のコミュニティ・サービス・ラーニング、日本語ボランティアに参加して、人生が変わったと言っても過言ではない。」という書き出しがありました。

た。これは決して大げさな書き方ではなく、実際にこの学生のその後の活動を考えると、彼の人生はこれで大きく変わったことを実感しました。タイワークキャンプに行って「人生が変わる」学生がいることをよく耳にしますが、自分の担当したコースでそのようなことが起こったことに感銘を受けました。もちろん、全ての受講生が劇的な変化を経験するという訳ではありませんが、接した人々の国、特に、韓国・中国という存在を強く意識するようになったと思われる学生は少なくありません。（それは、日本語学習者に韓国人・中国人が多いことが原因でもあります。）韓国に行った学生達が、韓国人の先生や学生と交流を続けていることも聞いています。このコースの後で、韓国の先生や学生が九州に修学旅行で来た際にわざわざ会いに行ったり、その後韓国に再びたずねて行ったり、韓国語・中国語を習うことを決意した学生たちもいます。私としては、コミュニティ・サービス・ラーニングでの体験をもとに、学生たちの一人でも明確な目的意識を持つようになったり、あるいは、アジアの隣国を意識するようになったりすることのお手伝いできたとしたらうれしい限りです。

注

¹ <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/00/01.htm>.

² <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/00/01.htm>.

³ <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/00/02.htm>.

⁴ <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/gaikoku/00/04.htm>.

⁵ 2004年1月29日「首相官邸・内閣官房 規制改革の推進に関する第3次答申（案）[総合規制改革会議]」 <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kisei/tousin/031222/1-03.html>.

⁶ http://www.jpfr.go.jp/j/japan_j/oversea/survey.html.

⁷ <http://www.jpfr.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2004/korea.html>.

⁸ http://www.bunka.go.jp/1aramasi/14_kokunaikyoku_gaikan.html.

⁹ http://www.bunka.go.jp/1aramasi/14_kokunaikyoku_jyukoushasuu.html.

¹⁰ http://www.bunka.go.jp/1aramasi/14_kokunaikyoku_gaikan.html.

¹¹ http://www.bunka.go.jp/1aramasi/14_nihongokyoku_kyokuutaishou.html.

¹² http://www.bunka.go.jp/1aramasi/14_nihongokyoku_kyoin.html.

参考文献:

McCarthy, Florence E. (2002) *Educating the Heart: Service Learning and Shaping the World We Live in*.

2002年4月24日のサービスラーニング入門のクラスでの配付資料

岡本牧子 (2000) 『地域の日本語教育 ボランティアで日本語を教える』アルク

河原俊明・山本忠行 (2004) 『多言語社会がやってきた』くろしお出版

国際交流基金 (2003) 『海外の日本語教育の現状-日本語教育機関調査・2003年- (概要版)』

国際交流基金 (pdf版:http://www.jpfr.go.jp/j/japan_j/oversea/survey.html)

細川英雄 (編) (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

石田美保・小川誉子美・小田切由香子・認田はるみ・吉田昌平 (2002) 『日本語でボランティア

ア外国語として日本語を教えるって?』スリーエーネットワーク

長澤成次 (編) (2000) 『多文化・多民族共生のまちづくり』エイデル研究所

田村太郎 (2000) 『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』明石書店

田中宏 (2002) 『在日外国人新版一法の壁、心の溝』岩波新書

日本語ボランティア講座編集委員会編 (1996) 『いま!日本語ボランティア』凡人社

飛田良文 (編) (2001) 『異文化接触論 日本語教育学シリーズ<第1巻>』おうふう

6. The Thai Work Camp: Service to God and Humankind

Paul Johnson

Scripture: James 2:14-17

An interesting question emerged at a recent Thai Work Camp pre-trip meeting. One student asked, "If Thailand is predominantly a Buddhist country, why are we going there to build a Christian church?" Fair enough. Good question. In all my years of work camp preparation meetings, that question had never emerged until that night. "If Thailand is predominantly a Buddhist country, why are we going there to build a Christian church?" I answered by saying that while it is true Thailand is largely a Buddhist country, up in the Northern remote regions, the villages where we hold our camps, up in those regions, the people are predominantly Christian. I have been in villages that are 90% Christian. That is a lot more Christian than my hometown in the heart of America! In that setting I told the class, I don't feel any reservation about building a Christian church. Also, I continued explaining, that the structure we are building there, a cinder-block church, serves the community in many ways; in addition to a house of worship, it serves as a meeting house, an education house, a health and human services house, and for the village children, a play house. And it is also the strongest building in the village, set on a firm foundation, with a sturdy roof, and a concrete floor - set to serve the people in many ways for many years.

That answer seemed to settle those many young inquiring minds. And so I quickly moved on, hoping someone wouldn't dig a little deeper on the topic and ask, "But if Thailand is predominantly a Buddhist country, why are there so many Christians up North?" (Thank God nobody asked me that question!) But since I just asked it in front of you all, let me respond for a moment now. One can couch that answer in many ways. "Why are there so many Christians up North?" One might respond with a soft Christian view saying, "The Holy Spirit moved through that land and by the grace of God alone the word became known to those many marginalized tribal people; the Lahu, Karen, Akha, etc." That is certainly one way to answer. Another way is to take a critical secular view that says, "20th century missionaries moved into those regions and through zealous efforts, converted the many tribal communities, bringing with them the lure of the benefits of the so called 'developed' world." If this is the case then, building the church, as innocent as it may seem, today, building the church puts us in cahoots with that earlier triumphal missionary movement.

I'm not sure how the answer to that deeper question resonates with my young campers. Of course lifting up that point, leads to another, looming question. Building a church in a rural village? How appropriate is even this kind of mission work in the 21st century. In other words in this age of higher cultural/political/religious sensitivity, what is the nature of Asian Mission in the 21st century? Should we be so bold as to do anything at all?

Defenders of such mission projects would certainly lock horns with detractors of such projects. Let me tell you how the argument might flow. Defenders would lift up the missionary past and point out the benefits many of these communities have enjoyed. In the case of the Akha people, four decades ago, it was the missionaries that created a script for their language and in so doing, gave that tribal tongue a future. Not only that, but missionaries founded schools for the tribal children - lifting up, even today,

reading (in the native tongue), writing and awareness about the dangers of drugs and HIV. Young tribal children are now growing up to become educators, health care providers and religious leaders for their own communities.

Detractors of this mission movement would argue, saying, "Yes, missionaries have created a script for the local people - all the while pointing them to read...the Bible. What is more, history will point out that converting tribal people to Christianity was the central goal of those early missionaries - often to the neglect of the pressing poverty and socioeconomic problems at hand."

Defenders would chime in, saying, "While there may have been some extreme methods used in the past, certainly these days, Christians have become very interested in a more holistic method. Certainly those engaged in ministry today cannot ignore the immediate social, economic or public health contexts." Today's successors to the earlier missionaries say their work is mainly to help tribal villages adapt to living in a globalized world, improving agricultural methods or developing handicraft businesses. For many, this ministry is an important part of expression of faith. Perhaps this is the emerging model of Asian mission in the 21st century.

Again, the detractors would argue, "The Akha way of life was very connected to their belief system, and when you changed their belief system you totally changed their way of life. One example of this was sited in a recent article about Thailand missionaries. One Akha village headman said, 'We'd lived together for many years. Then religion came into it, and the people who decided to convert mostly did it because they saw the rewards. They were arguing, My religion is better than yours.'"

Defenders of the mission movement would turn to one Akha man who said, "When I lived in the old village, there were a lot of restrictions. When you did something wrong, you had to sacrifice an animal. Here, I can talk to the pastor instead for advice. Life is a lot easier." Many Akhas cite such practical reasons for their conversion. Animal sacrifices place heavy burdens on people struggling to get by as their forest resources dwindle. The truth is missionaries offer know-how - things to help adapt to a modernizing world - and that modernization, more than any missionary activity in the 21st century, is a threat to hill tribe traditions. If missionaries stand back and do nothing, these cultures are going to be impacted by outside forces in quite strong ways. So the question the missionary has to ask is, what forces do I want those to be? Do I want them to be forces of the gospel - in its whole form - relevant in the framework of the culture? Or do I want these forces to be multinational corporations or economic systems or radio or television or videos that are deeply impacting people whether I like it or not? (What would Jesus do?)

The dissonance between the defenders and the detractors of the modern mission movement is not without parallel in the Bible. On one hand you have James, who in the reading today in bold tones says,

"What good is it, my brothers and sisters,
if you say you have faith but do not have works?
Can faith save you?
If a brother or sister is naked and lacks daily food,
and one of you says to them,
'Go in peace; keep warm and eat your fill,'
and yet you do not supply their bodily needs,
what is the good of that?
So faith by itself, if it has no works, is dead." (James 2:14-17)

James also says,

“For just as the body without the spirit is dead,
so faith without works is also dead.” (James 2:26)

James has a simple thesis. Living faith is accompanied by good works.

He presents us with an illustration by citing the example of Abraham.

"Was not our ancestor Abraham justified by works
when he offered his son Isaac on the altar?

You see that faith was active along with his works,
and faith was brought to completion by the works. ...

You see that a person is justified by works and not by faith alone."
(James 2:21, 22, 24)

You may recall in this episode, God asked Abraham to sacrifice his son as a test of faith. Fortunately the child sacrifice was interrupted and God delivered a ram to be sacrificed in Isaac's place. James says that because Abraham acted on his faith, he was in good standing with God.

The theological dissonance with this point is found in Paul's letter to the Romans where in Chapter 4, Paul uses the same story of Abraham and Isaac to conclude that Abraham was saved by his faith, not by his actions. Paul makes it clear that it is not works that save us. We are justified by faith. In other words we are set right with God through faith not through our actions - which no matter how good are simply not good enough to bring us into God's good standing.

Is Paul right on this point - or is James? Martin Luther clearly thought that Paul was right. But Luther, for once, missed the point James was trying to make. For sure Paul is right in arguing for the priority of faith. Faith comes first. It is by grace through faith we were welcomed into God's presence. Faith comes first, everything else, including works, come afterwards. James however, argues for the proof of faith. The actions of a Christian, James argues, prove that they have faith.

(Actions speak louder than words – we often say.) The actions are not saving in and of themselves, but they are a natural outpouring of a living faith. In this sense then, Paul and James are not battling each other. They are simply emphasizing different sides of the faith works coin. Paul tells us that faith has priority. It is the first thing that gets us motivated. And James tells us that the way we live is the proof of our faith.

Friends, I'm quite sure James would have us go to the work camp. Paul would have us go too. Make no mistake. The challenge for those of us engaged in Asian mission in the 21st century, and by us, I mean, you and me, and all others who would step forth to be counted, the challenge is for us to be bold enough to do something in this confusing age - be bold enough to do something in an attempt to lift up humanity to face the challenges of a transforming world. Be bold enough to do something, and hope and pray that, in the end, you are more of a blessing than a curse, that you do more good than harm, that in the end your efforts are pleasing in God's sight. May God bless all participants in this upcoming work camp. Amen.

(A sermon given at International Christian University Church on February 27, 2005)

7. 「Volunteerism と市民社会」

村上むつ子

1. はじめに--Volunteerism と学び

サービス・ラーニングは単なるボランティアとはちがうとよくいわれます。サービス・ラーニングは一言でいうと「学生が自発的な意志にもとづいて、一定の期間、無償で社会奉仕活動を体験し、知識として学んだ事を体験に活かし、また体験から生きた知識を学ぶ教育プログラム」です。では、ボランティアとは何でしょうか?あるアメリカの学者によると、日本人にこの質問をすると、ほとんど、「報酬をもらわないで働くことだ」と答えるそうです。「自分の時間を提供し、対価を目的とせず、地域や社会のために役立つ活動」という定義もあります。文部科学相の諮問機関である中央教育審議会が、奉仕活動や体験活動の推進策について中間報告をまとめたときに奉仕活動を説明したものです。

一方、ボランティアという言葉の語源はラテン語の VOLUNTUS で、その意味は「自由意志」、「決意」です。語源からいくと、ボランティアとはなによりも「自由意志により進んで他の人のために行動をする」となります。他の人の為になにかしたい、何かしよう、というのがボランティア精神、つまり、Volunteerism です。サービス・ラーニングもその精神を土台にしているわけです。

では、なぜ人はボランティアをするのでしょうか?まず、目の前に助けを必要としている人がいれば手を差し伸べる--というのは人の自然な気持ちです。が、目の前にそのような相手がなくても、人は自分の時間と労力を使ってボランティアをし、社会に役立ちたいと願います。障害児と遊んだり、老人ホームを訪問したりするなど様々なボランティアをしたけれど、「自己満足」しか得られず、ボランティア活動にはもっと何か意味があるのではないかと心残りだった、と述べた学生がいます。この場合は限られた時間に、求められている仕事をこなすボランティア活動だったからなのかもしれません。では、時間と労力を捧げることと別の意味がボランティアにあるのでしょうか?

「ボランティア活動には、学校や職場では得られない『出会い』『気づき』、そして『学び』があります。ボランティア活動を通して、自分の町で、そして社会で起きている事に気づき、出会った人びとの生き方から考えさせられ、自分の生活を見つめ直す機会、になるでしょう。そして、その中で年齢、職業、国籍を越えたさまざまな人びとのつながりがうまれる....」(「東京ボランティア・市民活動センター」)このような成果をボランティア活動で実感するには、自分が参加している活動の趣旨に深く賛同し、自発的にコミットし、一定の期間継続して行うことが必要になります。このようなボランティア活動には深い学びに繋がる可能性があり、これが、サービス・ラーニングという体験学習の教育プログラムの核心にもなるわけです。

人は知識だけでなく体験から学ぶ、という考えは教育哲学には古くから存在し、多くの教育者に支持されています。古くはデンマークのニコライ・フレデリック・セベリン・グルントヴィ(Nikoli Fraderik Severin Grundtvig, 1783~1872)の思想やアメリカのジョン・デューイ(John Dewey, 1859~1952)の実践的教育哲学などは一般的にもよく知られています。日本の教育にも実習のように体験的な学習は前からありましたが、最近では、ボランティアの体験活動で得られる「学び」を積極的に「ボランティア学習」として教育にとりいれようという動きがあります。2000年11月に大学審議会が文部大臣へ出した答申「グローバル時代に求められる高等教育

の在り方について」の中で「各大学においては、ボランティア活動などの社会貢献活動を授業に位置づけるなどの取組を進めるとともに、国内外でのフィールドワーク等の機会を充実することが必要である」と述べたのも象徴的な出来事です。

アメリカではもとより一般市民のボランティア活動が盛んですが、多くのアメリカ人は高校や大学でも「コミュニティー・サービス」を体験しています。自分が住んでいる地域社会で奉仕活動をするのです。ちょうど日本の高校生がほぼ全員、課外クラブ活動をするように、アメリカでは高校生が活発にコミュニティー・サービス活動を行います。学校によっては必修科目であるところもあり、課外プログラムであったりします。議論は分かれるところですが、高校時代のサービス活動の内容や評価は学生が大学の入学応募をするときに、その審査に大いに影響するとのことです。

そして多くのアメリカの大学でサービス・ラーニングに取り組んでいます。1980年代に大学学長会などで積極的にとりいれようという合意（Campus Compact）が生まれ、それ以来、各大学のサービス・ラーニングへの取組が年々、活発になっています。現在では全米で950以上の大学や短大がこの運動に加わり、メンバー校では平均して学生の36%がサービス活動を行っているそうです。このサービス・ラーニングをカリキュラムにいち早く、日本で取り入れたのがICUで、日本のサービス・ラーニング教育のパイオニアとして実績を積んでいます。

アメリカの教育現場でサービス・ラーニングが見る見るうちに広がった背景には、「人格教育（Character Education）」と呼ばれる教育を重視する方針があります。従来の知識習得型の履修科目の他に、人として必要な市民教育（civic education）、環境教育（environmental study）、社会的責任学習（social responsibility study）などの一連の教育プログラムが学校教育に組み込まれているのです。このようなプログラムの舞台として、コミュニティー・サービスやサービス・ラーニングを活用してきているのです。

2. 日本のボランティア活動

長い間、日本にはボランティアは育たないと言われていました。アメリカで普通の市民が自然にボランティアをするのは、キリスト教をベースにした博愛精神や奉仕の心があるからで日本にはそのような伝統がない、というのが定説でした。確かにアメリカの地域社会は教会を中心になりたっている所もいまだに多く、教会を中心にした地域の慈善活動も盛んに行われています。

日本人はボランティア精神に乏しいという認識が大きく変わったのは、この10年です。1995年の阪神淡路大震災が起こると、自然発生的に全国から延べで150万人ともいわれるボランティアが続々と被災地には駆けつけました。日本ではそれまで、この規模のボランティアが集結したこともなく、市や県の行政も想定もしていなかったため、最初は混乱もありました。ボランティアも一部右往左往しましたが多くはそれぞれの判断で現場に行き、自律的に活動をしました。その後、97年にはロシア

船ナホトカ号の重油流出事故があり、ここでも約30万人に及ぶ老若男女のボランティアが全国から集まりました。ここではボランティアを組織するノウハウも活用され、海岸清掃も効率的に出来たといえます。いずれも「善意が奇跡を起こした」といわれ、メディアはこぞって1995年を「ボランティア元年」と命名したのです。が、自分の意志で人の為になにかしたいという



気運は、着々と日本に広く育っていたのです。

震災と同じ年の1995年に東京には「さわやか福祉財団」が生まれ、話題になりました。この財団は日本でボランティア活動を広めるのが目的ですが、注目されたのはそれまでロッキード事件でらつ腕ぶりを示し、有名になっていた東京地検特捜部の花形検事であった堀田力（ほった・つとむ）氏が設立したからです。堀田検事は水も漏らさない綿密な捜査で広く知られ、同僚からは「かみそり」というあだ名で呼ばれ、そのまま検事のキャリアをすすめば確実に検察トップになるはずでした。その堀田さんが転身の決意をしたのには若い時のアメリカ滞在経験があったからです。

1970年代にワシントン DC の日本大使館勤務になり、二人の幼い子どもを連れて家族で新生活を不安な気持ちで開始しました。その時、多くのボランティアに巡り会い、子ども達も差別やいじめの経験することなくアメリカ生活を満喫しました。差別やいじめを体験したのは、任務が終わって日本に帰国してからです。英語しか話せなかった小学生と幼稚園児の子どもたちが日本の子どもにひどい目にあわされたのです。これは大人が差別をする気持ちをもっているからだ、このような日本の社会では人は幸せには暮らせない、と堀田さんは痛感したそうです。「相手がどのような人であろうと、同じように受け入れ、助け合う社会にしないと、日本人は幸せになれない。だれにも暖かい社会にするためには、助け合いのボランティア活動を広めることが必要だ」というのが彼の結論でした。そうして、1991年には定年前の57歳で検事を辞めて、「ボランティアを広めるボランティア活動」をはじめ、4年後には、「日本中にボランティアを広める」ための財団を始めたわけです。

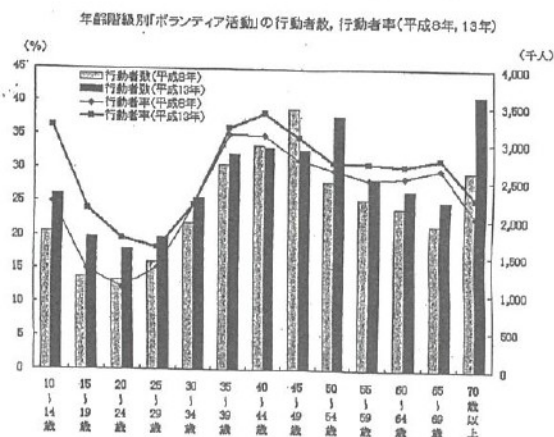
それから10年、いまでは、日本人の2人に1人はボランティア活動に興味を持っているとも言われ、ボランティア精神も年々、高まっています。総務省の平成13年社会生活基本調査によると13年の10月までの1年間でなんらかのボランティア活動をおこなった日本人は、3,263万4千人で、10歳以上の人口に占める割合は28.9%にもなるといいます。その前に調査のあった平成8年と比較しても、450万人近く増え、人口における比率も3.6%上がりました。統計をみると、若者の参加や女性の参加の増加が目立ちます。

後で詳しく触れますが、1998年に特定非営利活動促進法（NPO法）が施行されてからは、市民のイニシアティブによる活動が組織化・法人化され、それがボランティア活動の受け皿とも、促進剤ともなっています。年々高まるボランティア精神に呼応するように各市町村にも社会福祉協議会を中心に地域のボランティアセンターが設置され、また各大学にも学生の関心の高まりと歩調をあわせるようにボランティアセンターが生まれました。そのボランティアを支援するNPOも台頭するなど、この数年はダイナミックな展開が続いています。

3. ボランティア活動は考察を促す

ボランティア活動をする人たちはよく「自分の方がもらっているものが多い」と言います。ボランティア活動を通して、社会を新しい側面から理解するようになり、奉仕の相手との関わりが生まれ、学びや深い内省につながる、という喜ばしい成果もあります。一方、そのプロセ

総務省 平成13年社会生活基本調査



スにはつまずきも、葛藤もつきものようです。ボランティア活動も深く持続して行えば、責任が生まれプレッシャーも過大になり、本来の自分の生活を犠牲にしているような気持ちになることもあります。そしてボランティア活動で他人に関わると、時には、自分自身が深い次元で根源的に揺さぶられ、自分自身と向き合わざるを得なくなるということもあります。

昨年、「セックス・ボランティア」という衝撃的な題名の本が出版されました。著者の河合香織さんは1974年生まれ的女性ライターで、この本で障害者の性とその介助の実態報告をしています。障害者の性といえは少し前には完全にタブー視されてきましたが、現状を理解しようと介助のケースを取材し、障害者本人や介助者（ボランティア）の話の聞きとりをしました。そして、このような介助活動がオランダには公に存在し、行政も税金をつかって支援をしている事を知り、現地へ赴きます。そしてその長い取材の全過程で、彼女は次第に自分自身の性への考え方と対峙していきます。日本では安積遊歩（あさか・ゆうほ）さんという骨形成不全症を持つ障害者運動家に「障害者の性を語るためには、まずその周囲にいる人たちが自分の性を見つめることから始めないとはいけません」と指摘されます。また、オランダ人では夫婦で障害者とセックスまでするボランティアをする男性に「一体、なぜ？」と疑問を投げかけ、「あなたも誰かが川で溺れていたら、見過せないでしょう？」と逆に質問されます。

河合さんはボランティアでなくライターですし、セックスの介助ボランティアというのはいささか特殊なケースですが、ボランティアであれ、ライターであれ人と関わるといふ営みは人に考察を促すものです。奉仕をする相手が弱者であればボランティアは自分の社会性や倫理性を試されることにもなります。老人や障害者、死に直面している病人や社会的援助を必要としている人たち--このような人びとに関わるといふのは、ただ、親切心だけでは済まないことも多いのです。ボランティアの行為を見つめることは、時には深い疑問も違和感もうまれ、ボランティアや周辺の人びとには反省や反発があるでしょう。そういう事に丸ごと真摯に向き合えば、向き合うだけ学びも深くなることになります。

日本の学生が外国でサービス活動を行う中にも、考察を求められる要因があります。毎年多くの日本人学生が日本と経済格差が大きい発展途上国にスタディツアーやインターンシップで訪れ、現地のNPOを見学したり、活動に参加しています。が、日本人は「支援活動をしている」つもり、「開発の現実を理解する活動」のつもりでも、迎える方はそういう訪問客を常に歓迎しているとも、好意的な気持ちを持つとは限りません。ぞろぞろ、団体で自分達の生活をのぞき見する「豊かな国」の連中だと思っただけかもしれません。訪問が終わればまた豊かな母国にもどって、自分達とは関係のない生活をする他人だ、と空々しく思うかも知れません。

Bangladesh やネパールの貧しい人達を支援している日本のNGOシャプラニール理事を務める大橋正明氏は恵泉女学園大学の教授として海外体験学習の指導にも携わっています。昨年（2004年）行われた「海外体験学習体験研究会」の東京での会議の総括では、大橋氏は「学生がお世話になる相手先との関係」にふれ、「第三世界の人々が貧困かつ無力で、外からの助力を待っている、という前提で学生の活動が行われるなら、相手側に問題があることを前提にしてしまう」と留意を促しています。

大橋氏はまた、更に、次のような指摘をしています。「こちらが教育のために相手にサービスを提供することが、相手にとって問題を生み出す場合もある、ということも理解しておく必要があると思います。例えば海外活動に参加する学生、各人15万円、それが20人分で300万円を使っているとします。それだけの資金があれば、例えば Bangladesh では、おおよそ3万人分の日雇い労働を創出することが出来ます。そのことを通じて、貧しい家族が収入を得ることが出来るのです。逆に言うと、学生によって提供された労働の分だけ、相手社会の貧しい人々の労働の機会を奪うことになります。」日本の学生がいかなければ3万人の雇用が増えるわけでないにせよ、このような発想は奉仕の現場での体験を積まないでとてこないものです。

4. ボランティア精神の隆盛の社会的な背景

ボランティアリズムの社会的意義や役割を論じるとき、「民主主義」、「人権」や「多様性」などの社会的概念を背景に考えないわけにはいきません。市民たちが自分たちの視点から考えて行動すれば、社会の変革者（drivers of change/change agent）になるのだという認識はこのような概念が受け入れられているからこそ育ってきているからです。市民が動けば、社会が変わる、という考え方を世界の中の人びとが共有するようになったのには、情報技術（IT）の急速な進展やグローバリゼーションの加速も後押しをしました。そして、それと同時に各国に NGO（Non-governmental organization＝非政府組織）または NPO（Non-profit organization＝非営利組織）が台頭してきたのが重要な要因です。これらの新しい形態の組織がこの 10 年から 20 年の間に続々と創られ、活発な活動を展開し、多大な成果をもたらし、ネットも活用して相互に繋がり、世界的なネットワークを作ってきました。それが一般市民のボランティアリズムを高め、受け皿として活動の場を提供してきたのです。

NPO と NGO はよく同義語のように使われます。両方とも政府に関係がなく、企業と違って営利を目的とはしない活動のために組織され、どこにも所属しない独立した団体です。そのなかでも、特に政府とはちがう民間組織であることを強調する場合、たとえば国際的な支援活動をしている団体など NGO と自ら呼んだり、呼ばれたりします。NGO という言葉そのものが始めて使われたのは 1945 年のサンフランシスコ会議で、ここでオブザーバーとして参加する資格を得た民間団体がありました。それを「政府以外の代表」という呼び方をしたのが始まり、とされています。

1970 年代には、まず欧米を中心として NPO 活動が広がりその活動内容が知られることになりました。国連が主催をした 1972 年のストックホルムの国連人間環境会議やその後の「国連女性の 10 年（1976 年-1985 年）」の国際会議では、各国から NGO が集結し、国連やメンバー国政府に劣らず活動成果をあげました。NGO の存在や活動がメディアにも大々的にとりあげられ、NGO の主張や提案が行政の政策決定に影響力をもつ存在、社会変革を押し進める推進力として認知されるようになったのです。80 年代の終わりに冷戦構造がくずれ、旧ソ連に属していた東欧諸国が民主化に向う中で社会的混乱に陥りました。その時、政府は無力だったのに無数の無名 NPO が活躍したという事もしばしば指摘されます。それまでおとなしく従属するしか術がなかった市民たちが民主主義的なマインドを自律的に身につけていき、国際機関や欧米の財団の資金援助を受け、さらに積極的な働きをするようになりました。

その後、97 年の対人地雷禁止条約の採択、99 年の世界貿易機関（WTO）閣僚会議の決裂などの国際舞台の動きにも NGO が大きな影響力を発揮したのは世界が認めるどころです。2003 年にはロイヤル・ダッチ・シェルがユネスコの世界遺産指定地域での原油掘削の停止宣言に至ったのも、NGO の力があつたからといわれ、大企業の投資行動や経営方針にも NGO の見解は無視できないという認識が広まりました。また、2004 年にイラクのアブグレイブ刑務所でイラク人収容者がアメリカ兵に虐待されていたという事件が暴露されましたが、これも人権 NGO アムネスティ・インターナショナルや他の国際 NGO が赤十字国際委員会と見解を発表し、アメリカのブッシュ政権に対し大きな圧力となりました。政府も営利セクターも、NPO と共生する道を模索せざるを得ない時代になってきているのです。

日本では 7 年前の 1998 年に NPO 法が施行されてから、内閣府や都道府県の認証を受けた NPO 法人（特定非営利活動法人）が急増してきています。その数は最初の 4 年あまりで着々と 1 万を越え、今年の一月末には 2 万 350 団体となりました。その NPO を支援し、行政やボランティア志望者また企業の社会貢献担当者となつたような「NPO センター」、「NPO サポートセンター」、「NPO 協会」、「NPO 情報ネット」などの組織も各地に生まれてきています。NPO や NGO が爆発的に増えたこの 7 年という年月には日本ではバブル後の不景気が続き、国も地方も

財政難にあり、硬直した行政組織では対応できない様々な問題も山積したままでした。そこに、自主的に市民グループが対応に乗り出し、それが続々NPO という形をとっていったという面があります。

NPO の活動は老人、こども、教育、医療、まちづくり、災害救援、国際交流、ジェンダー、福祉、スポーツ、人権、メディアなど多岐にわたっています。例えば新潟県の NPO のリストの一部をみるだけで、「メンタルフレンドにいがた」（不登校、ひきこもりの青年支援）、「Made in 越後」（越後の人、モノ、場所の紹介）、「緑農村」（安全食システムづくり）、「旧ユーゴ新潟ネット」「新潟水辺の会」「新潟国際ボランティアセンター」「まごころヘルプ」「ながおか『地球村』」「しまみらい振興機構」（佐渡島の社会運動）など、実に多彩な活動が垣間見られます。NGO の方の活動の対象分野は、「開発・環境・人権・平和の 4 つに大きく分けることができる」と国際協力 NGO センターではいいます。その中でも、「とくに教育・子ども、保健医療、職業訓練、ジェンダー・女性、植林などの活動が盛んに行われている」そうです。

5. ボランティアリズムと NPO がつくる「市民社会」

ボランティア活動する市民が増え、NPO や NGO が活性化すると何がおこるのでしょうか？多くの人たちが「市民社会 (Civil Society)」だと答えます。「市民社会」とは今日では流行りの感さえある言葉ですが、一言でいうと「市民セクターがつくる市民 (主導) 社会」です。市民自らが行動し、社会の変革に参加していける社会、ともいえます。そして、時に市民社会は市民と NPO とイコールの意味合いをもちます。

例えば、アメリカにおいては、NPO の代わりに CSO (Civil Society Organization) という言葉を使う事も多くなっています。NPO が活発になってきたおかげで「市民」という言葉にも古臭さがなくなり、言葉が定義し直されるにつけイメージも現代的になり、若者にも違和感がなくなってきました。実際、ボランティア活動やボランティア体験教育も英語では "civic engagement"、"civic responsibility"、"civic education" というような言葉で表現されるようになってきています。お上 (政府) とそれに従う民 (国民) という旧式ヒエラルキー構造ではなく、ボトムアップの市民社会をつくるのが、ボランティアであり、多彩な NPO であり、また市民社会そのものであるわけです。サービス・ラーニング教育もまさにこの流れの一環として位置づけることができます。

最後に一つ、「新しい市民社会の実現に寄与すること」を理念とした、小さいけれどユニークな日本の NPO を紹介します。名称を「市民社会創造ファンド」といい、NPO 資源を豊かにし、民間非営利セクターの自立した発展と活発化をはかるのがこの団体の目的です。活動としては、例えば、独自に調達した資金で NPO の支援組織の活動を助成し、また、NPO 企業や財団の依頼を受け、NPO の活動に助成するためのプログラムを開発し、公募・選考の実施をします。

またこの団体は「NPO の現場を市民社会の小さな学校に」または「Small School for Civil Society (SSCS)」というプログラムを実施しています。学校で学ぶ若者を優良 NPO に送り込み、一年間のインターン体験をするのを支援するというものです。いわばこの NPO 組織がサービス・ラーニングを主催しているわけです。忙しい大学生、大学院生また専門学校生が責任をもって、継続的にある NPO で働くというのは、時には大きな負担となります。体験した学生の話聞いてもインターン実習期間のある時期にはおおいに煩悶した、と言います。しかし、同 NPO には、このような経験こそが学びにつながるという信念があり、将来の市民社会の一員になるための教育を支援して、将来の「市民社会」の拡大、充実化につなげようという意志があります。この、市民社会創造活動の母体そのものが一つの NPO でもあり、ここも専門家ボラン

ティアや個人ボランティアに支えられています。この営みにはボランティアリズムも、NPO もサービス・ラーニングと同じ学びも市民社会も見えていて、その行く手には明るい未来を感じます。

(終わり)

参考文献

<書籍>

オヴェコースゴール/清水満『デンマークで生れたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界—グルントヴィと民衆の大学』、新評論、1993年

John Dewey, “Experience And Education” ,Simon & Schuster, New York, 1997

西宮ボランティアネットワーク『ボランティアはいかに活動したか~震災 60 日もうひとつの阪神大震災記録』日本放送出版協会、1995年

NHK 取材班『ボランティアが開く共生への扉~阪神大震災からの報告』、日本放送出版協会、1995年

堀田力『再びの生きがい特捜検事からボランティアへ』、講談社 1995年

河合香織『セックス・ボランティア』新潮社、2004年

Michael Edwards "Civil Society", Polity Press/Blackwell Publications Inc. 2004

<資料>

大学審議会答申「グローバル時代に求められる高等教育の在り方について」
2000年11月、<http://www.mext.go.jp>

海外体験学習研究会「第一回研究会のまとめと今後」2005年2月、
<http://www.fps.chuo-u.ac.jp/~iip/elkenkyukaireport.htm>

記事「NPO 選別される時代」朝日新聞、2005年2月24日

平成12年度国民生活白書「ボランティアが深める好縁」経済企画庁

平成13年度社会生活基本調査「増加するボランティア人口」総務庁統計局

Neera Chandhoke, Online article “What the hell is 'civil society' ?” open Democracy Ltd, 2005
<http://www.opendemocracy.net>

<ウェブサイト>

東京ボランティア市民活動センター <http://www.tvac.or.jp/>

財団法人 さわやか福祉財団 http://www.sawayakazaidan.or.jp/i_index.htm

Campus Compact <http://www.compact.org>

National Service-Learning Clearing House <http://www.servicelearning.org/>

NPOWEB (シーズ 市民活動を支える制度を作る会) <http://www.npoweb.jp/>

NPO JAPAN NET (NPO 情報ネットワークセンター) <http://www.npo-jp.net/>

日本 NPO センター (JANIC=Japan NGO Center for International Cooperation) <http://www.janic.org/>

8. Elements of a Successful Service Learning Experience

Florence E. McCarthy

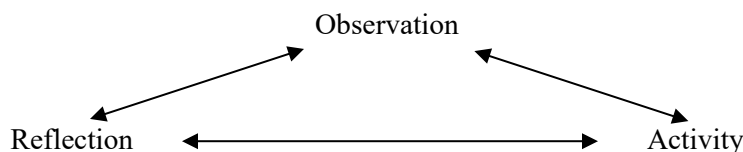
Introduction

Service learning has become an important curriculum innovation in countries around the world. The International Christian University has led the way in establishing service learning in Japan, and ICU students are actively pursuing service learning experiences in agencies in Japan as well as elsewhere in Asia, Africa, and the United States. The service learning program at ICU is built around providing students with a combination of an introduction to, good preparation in, and lots of information about the possibilities offered in service learning experiences. While these inputs can be offered to students, it is impossible to guarantee them a "successful" service learning experience. Only the students themselves can do this, as they are the ones that must decide what "successful" means, and how they are going to achieve that success. This is not to suggest that the administration and faculty supporting service learning do not have an idea of what a successful service learning experience would be for students. To this end, the different service learning courses are provided. These courses include the Introduction to Service Learning, the Preparation for Service Learning Field Study, and the seminar in Reflections on Service Learning Experience.

There is some question concerning the context of the various courses, particularly the Preparation course. This course focuses on what students need to do to arrange for and then make the most of their service learning placements. The purpose of service learning as has been discussed throughout this book, is to encourage students' involvement in their own learning through the engagement with community agencies in providing needed service to the agency and their staff and participants. While there are many different types of placements that students may arrange for themselves, basically service, or doing something for others, is focused in not-for-profit organizations such as community agencies, government offices, regional offices of the United Nations and so on.¹

The Elements of Success

The process of being successful in one's service learning experience requires a combination of elements. These are noted below in a triangle that indicates the interconnectedness and interaction involved in making the most of one's service learning experience. These elements will only be briefly described in the following pages, as a means of illustrating the content of the Preparation course, and to suggest the kinds of skills and techniques students will need to develop in the process of making the most of their service learning experiences. The elements included in the triangle below represent just a minor, but important, portion of the content of the Preparation course.



¹ A comprehensive list of organizations that are suitable for service learning placements is available at the Service Learning Center, 104 Administration Building or visit the service learning web-site.

The elements of observation, activity and reflection are the most basic elements in being successful as a service learning student. Each will be considered in turn. But first a note about the nature of the triangle. It is an isosceles triangle, meaning that each side is equidistant from the others, and that the angle represented in each corner of the triangle is the same. The double-headed arrows connecting the points of the triangle indicate that each element of the triangle is equally important and interactive with its two other points. This suggests that successful service learning requires the development and practice related to observation, activity and reflection.

Observation

Most people are quite unobservant; they see very little of what goes on around them. Many factors contribute to this state. For example, in Japan, many people, and students in particular, tend to be self-absorbed, overly tired, stressed, preoccupied and rushed. The combination of these factors encourages people to just pass through most of their days in a daze, and only really pay attention to their work; the rest is just a blur. When people are not paying attention to what is going on around them they tend to miss out on what other people are doing, or what kind of a day it is, or what's going on with their friends or colleagues at work or at the university. Being unaware means it is difficult for such people to be very sympathetic to others, or to take the initiative at work, or to be very engaged and supportive with friends or family members. In addition to not adding much to the social situations in which these people are involved, they often miss out on creating or sustaining good social relationships with others. In severe situations, these kinds of people can become quite alienated from the world around them.

The difference that observation makes is that it focuses people's attention on events, people, and activities going on around them. Observation is not a gift; it is a skill that anyone can develop. However, how to do it, and what is good observation has to be taught and learned. The Preparation course deals with observation and gives student's the skills to be good observers.

Activity

Any service learning placement involves students in activities related to the ongoing work of the agency, international organization or government office where the student is placed. The range of activities students are asked to do are varied and change over time. Agencies and organizations tend to give new students simple tasks in the beginning of the student's association with the organization, just to see what the student can do, and to get some measure of the student's capabilities. This may be somewhat conflicting or confusing to students, as they may expect to do only important work right from the beginning, and may misunderstand why such simple tasks are being given to them.

The staff are *observing* the students to gauge their interest, enthusiasm, responsiveness and ability to take responsibility and follow through with tasks. This suggests that observation is one way people can gather information that becomes useful in decision making. Staff members will learn about students not only from what students say or write; they will learn by observing what the students do.

Another lesson from this situation is that all activities are important in agency work. The work the student does frees a staff member to do other work. If the student didn't do the work, someone else would have to, or the work would not be done. Even simple tasks have a place and need to be done.

A third lesson is that staff members learn by observing what is going on around them, and become adept at adapting activities to different people and situations as they arise. For example, this combination of observation and activity is used to gauge students in their placements and becomes the means by which

more important work is assigned to students. Activity is a complex and complicated process that engages people in the world around them; provides them with information useful in understanding situations and making decision, and is a key to understanding others through the approach others take to the activities in which they are engaged.

Reflection

While it is important to be observant and active in one's placement, it is not enough. A successful service learning experience requires that students think about what goes on around them, in addition to being active and observant. This process of reflection is also a skill that is quite undeveloped in most people. Not only are most people, students included, unobservant, they are non-reflective as well. This means that people don't take in much of what goes on around them, and don't think much about what they do take in.

There is a difference between memorization and reflection. As students, we are encouraged to memorize lots of information and to be letter perfect in parroting it back to the professor. But often if students are asked to explain what they have memorized, they are unable to do so. Why? Because most often they have not thought about the content of what they have been memorizing, and so are unable to explain it. In the same way students may have experience, but don't necessarily learn from it. This is why being successful in service learning is really a task for the students, faculty and staff can provide the best preparation and the best placements, but if the students aren't engaged in thinking about what they have experienced, it will be very difficult to have a successful placement.

Reflection is the process of thinking about the situations one is in; of thinking about the people and activities one is engaged with and in; of actively drawing conclusions and inferences from, and using these inferences to guide further action. Reflection is a skill that requires practice and time. There are no short-cuts and no easy ways to become a reflective person. However, a successful service learning experience requires students to be reflective; to think about, learn from, and use the knowledge they've gained from their experiences to inform their future actions and decisions. The Preparation course gives students key insight and experience in developing reflective skills. Like so much in student-oriented learning, however, the faculty can provide the skills and techniques, but it is up to the students to make the most of these inputs, and to actively learn from what they do by reflecting on their activities, the actions of others, and the possible ways of interpreting what has occurred.

March 2005

「サービス・ラーニング研究シリーズ 1」

2005年4月12日発行

発行 国際基督教大学サービス・ラーニング・センター
(センター長山本和)

〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2

tel(0422)33-3687

fax(0422)33-3685

URL:<http://subsite.icu.ac.jp/sic>

Email:slc@icu.ac.jp

印刷 株式会社文伸

〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 11-12-7

tel(0422)60-2211

fax(0422)60-2200

本誌に掲載された著作物の著作権は各執筆者にある。ただし、論文などを出版または他誌に掲載する場合はサービス・ラーニング・センターに届け出て、本誌よりの転載であることを付記すること。